



TITLE:

評點遡源

AUTHOR(S):

張, 伯偉; 齋藤, 希史

CITATION:

張, 伯偉 ...[et al]. 評點遡源. 中國文學報 2001, 63: 1-67

ISSUE DATE:

2001-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177881>

RIGHT:

評點遡源

張 伯 偉

南京大學

齋藤希史 譯

國文學研究資料館

たのである。

評點は、いつ始まったのであろうか。先人の主張は一樣ではない。梁代から始まったとするのは、章學誠『校讐通義』宗劉に、

評點之書、其源亦始鍾氏『詩品』、劉氏『文心』。然彼則有評無點、且自出心裁、發揮道妙。又且離詩與文而別自爲書、信哉、其能成一家言矣。

評點の書、其の源は亦た鍾氏『詩品』・劉氏『文心』に始まる。然るに彼は則ち評有りて點無く、且つ自ら心裁より出で、道の妙なるを發揮す。又且つ詩と文とより離れて別自^{べつ}に書と爲すは、信なるかな、其れ能く一家言を成せり。

と云い、曾國藩『經史百家簡編』序にもまた、

梁世劉勰・鍾嶸之徒、品藻詩文、褒貶前哲、其後或以丹黃識別高下、於是^{こゝ}有評點之學。

梁世の劉勰・鍾嶸の徒、詩文を品藻し、前哲を褒貶し、其の後或いは丹黃を以て高下を識別す、是に於て評點の學有り。

評點は、中國文學批評の傳統的方法の一つである。唐宋以後、詩文の評點は次第に盛んになり、明清以來の小説・戯曲批評となると評點はめずらしくない。こうした批評形式はテキストの編纂ともしばしば結びつき、讀者に見どころを教え、文章の規範を示さんとするのだが、それゆえ識者からは批判されることもあった。しかし、人々は「載道」だの「言志」だの「美刺」だの「褒貶」だのといった「大判斷」を聞き慣れていたもので、これらもつばら作品個別の優劣に重點をおいた「小結果」^①を目にすると、腑に落ちるような、もしくは耳目が改まるような感をおぼえもし

と云う。唐代起源とするのは、袁枚『小倉山房文集』古文凡例に、

古人文無圈點、方望溪先生以爲有之則筋節處易於省覽。按唐人劉守愚「文塚銘」云有朱墨圈者、疑卽圈點之濫觴。姑從之。

古人の文に圈點無し、方望溪先生以爲らく之有れば則ち筋節の處省覽に易からん。按ずるに唐人劉守愚の「文塚銘」に朱墨圈有りと云うは、疑うらくは卽ち圈點の濫觴ならん。姑く之に従う。

と云い、南宋起源だとするのは、吳瑞草「瀛奎律髓重刻記言」に、

詩文之有圈點、始於南宋之季而盛於元。

詩文の圈點有るは、南宋の季に始まりて元に盛んなりと云う。また、『四庫全書總目』卷三七『蘇評孟子』の提要に云う、

宋人讀書、於切要處率以筆抹。故『朱子語類』論讀書法云、先以某色筆抹出、再以某色筆抹出。呂祖謙『古文關鍵』・樓昉『迂齋評注古文』亦皆用抹、其明例也。

謝枋得『文章軌範』・方回『瀛奎律髓』・羅椅『放翁詩選』始稍稍具圈點、是盛於南宋末矣。

宋人は書を讀むに、切要の處にて率ね筆を以て抹す。故に『朱子語類』に讀書法を論じて云う、先ず某色の筆を以て抹出し、更に某色の筆を以て抹出す、と。呂祖謙『古文關鍵』・樓昉『迂齋評注古文』亦た皆な抹を用いるは、其の明例なり。謝枋得『文章軌範』・方回『瀛奎律髓』・羅椅『放翁詩選』始めて稍稍圈點を具え、是れ南宋末に盛んなり。

先人の見方は、おおむねこのようなものだ。文學評點の成立を考えるなら、確かに南宋に始まる。しかし評點法の形成自體は、より前代に遡るべきであろう。評點の意は、「評」と「點」の兩端を含むもので、さらに評する對象のテキストと互いに關わり合っているのだが、宋人はそれらを一體のものとし、一つの文學批評の形式を作り上げた。南宋以後、評點は廣く行われるようになり、評點のない書物は存在しないほどであったが、これには多岐にわたる社會的かつ歴史原因が存在する。それゆえ、評點の形成およ

び發展を考察するに當たつては、さまざまな方面からその本源を追及する必要がある。

一章句と評點

「點」はつまり點を標しるすことである。その起源は、古人の章句の學に遡る。章句を評點と結びつけたのは、曾國藩であつた。その『經史百家簡編』序に云う、

自六籍燔于秦火、漢世掇拾殘遺、……支分節解、於是有章句之學。……科場有勾股點句之例、蓋猶古者章句之遺意。……故章句者、古人治經之盛業也。而今專以施之時文圈點者、科場時文之陋習也。

六籍の秦火に燔やかれて自り、漢世に残遺を掇拾し、……支分節解す、是に於て章句の學有り。……科場に勾股點句の例有り、蓋し猶お古え章句の遺意たるがごとし。……故に章句なる者は、古人の經を治むるの盛業なり。而今專ら以て之を時文の圈點に施すは、科場時文の陋習なり。

しかし、曾國藩が章句を尊んで圈點を退けるのに對して、

呂思勉「章句論」は批判して云う、

圈點之用、所以抉出書中緊要之處、俾人一望而知、足補章句所不備、實亦可爲章句之一種。徒以章句爲古人所用而尊之、圈點起於近世而皆之、實未免蓬之心也。^②

圈點の用は、書中緊要の處を抉出し、人をして一望して知らしめんとする所以にして、章句の備えざる所を補うに足り、實に亦た章句の一種と爲すべし。徒らに章句を以て古人の用うる所と爲して之を尊び、圈點の近世に起るをもつて之を皆そるは、實に未だ蓬の心を免れざるなり。

「標點」という語は、南宋に始まるものかもしれない。

『宋史』儒林傳八「何基傳」には、「凡所讀無不加標點、義顯意明、有不待論說而自見者。（凡そ讀む所は標點を加えざる無く、義顯かに意明らかにして、論說を待たずして自ずから見わる者有り）」と云う。私には、「評點」という語の當初の意味がつまり「標點」だったのではないか、とすらおもえる。例えば、敦煌遺書 S. 5571『妙法蓮華經』卷八「末尾の書入」に云う、

余爲初學讀此經者、不識句レ文、故憑點之。

余 初學にして此の經を讀む者の、句レ文を識らざるが爲に、故に之に憑點す。

「レ」は、字を顛倒させて讀む符號で、「句文」は「文句」となり、「憑點」は、「評點」のことで、ここでの實際の意味はすなわち標點であろう。とはいえ章句の起源はたいへん古く、その間の變化も相當なものである。ここに概観しておこう。

『禮記』學記には、「比年入學、中年考校。一年、視離經辨志。（比年に入學し、中年に考校す。一年、經を離^{わか}ちて志を辨ずるを視る）」という。鄭玄の注には「離經、斷句絶也。

（離經は、句絶を斷ずるなり）」といい、孔穎達の疏は、「離經、謂離析經理、使章句斷絶也。（離經は、經理を離析し、章句をして斷絶せしむるを謂うなり）」と云う。すなわち、章句を切り分けることは、段落の大意を理解するのに役立ち、先秦以來、初學者の主要なカリキュラムの一つであったのである。舊說に、章句は子夏に始まる、と云う。『後漢書』徐防傳にその上疏を引いて云う、「臣聞詩書禮樂、定自孔

子、發明章句、始於子夏。（臣聞く、詩書禮樂は、孔子に定まり、章句を發明するは、子夏に始まる、と）。子夏の名は卜商、孔門弟子の中では「文學」をもつて稱されており、^③『史記』仲尼弟子列傳の記載では、孔子が亡くなった後、河西（西河）に隱居して、魏の文侯の師となったという。司馬貞の『索隱』は「子夏文學著於四科、序『詩』傳『易』。又孔子以『春秋』屬商。又傳『禮』。（子夏の文學は四科に著われ、『詩』に序し『易』に傳す。又た孔子は『春秋』を以て商〔子夏〕に屬す。又た『禮』に傳す）」と云うが、そうであるなら、彼が「章句を發明した」のも、大いにありえよう。

早期の斷句符號は、當然のことながらわりに簡單なもので、「鈞（、）」、「句（、）」、「三」、「點（、）」、「ム」、「口」などがあつた。「、」は、一まとまりの段落を示す。『流沙墜簡』の「屯戍叢殘」中の一簡にはこの符號が三カ所見られるが、王國維は「陰長四人、前三人名下皆書、以乙之、如後世之施句讀。蓋以四人名相屬、慮人誤讀故也（陰長四人、前三人の名の下に皆な「、」を書して以て之を乙るは、後世の句讀を施すが如し。蓋し四人の名の相い屬^{つづ}き、人の誤讀す

るを慮るを以ての故なり」という。楊樹達は、この符號を『説文』の「丨」つまり、「鉤」の標識だと考えた。^④句（丶）は、斷絶を示すのに用いる。『説文』「丨」部には、「丨、有所絶止、而識之也（丨、絶止する所有れば、丨て之を識すなり）」という。「句」と「讀」は疊韻字で、意味も等しい。^⑤「三」は、字の重なる符號で、趙翼は、「凡重字下者可作二畫、始於石鼓文、重字皆二畫也。後人襲之、因作二點。今並有作一點者。（凡そ重字の下なる者は二畫と作すべきは、石鼓文に始まり、重字は皆な二畫なり。後人、之を襲い、因りて二點と作す。今並びに一點と作す者有り）」（『陔餘叢考』卷二二「重字二點」條）という。「點（丶）」は消去を示し、書き誤りの字の上に施す。『爾雅』釋器に「減謂之點（減は之を點と謂う）」とあり、郭璞注には「以筆減字爲點（筆を以て字を減するを點と爲す）」という。劉知幾『史通』點煩篇には、「文有煩者、皆以筆點其上。凡字經點者、盡宜去之。（文の煩有る者は、皆な筆を以て其の上に點す。凡そ字の點を経た者は、盡く宜しく之を去るべし）」とある。「ム」は「私」の古字で、何琇の『樵香小記』卷下「ム地」條によ

れば、本來は三角の圍い（△）であつたが、それは四角の圍い（□）と同様、缺字の符號であるという。

漢代以降、章句の學問は新たな發展を示し、たんに分章斷句に止まらないものとなつたし、また「符號」の意味で覆い盡くすこともできなくなつた。とはいへ評點符號そのものは發展を續け、敦煌遺書の中には、こうした符號が少なからず傳えられている。そのうち使用頻度が比較的高いものだけでも十七種、「句號・頓號・重文號・省代號・倒乙號・廢讀號・刪除號・敬空號・篇名號・章節號・層次號・標題號・界隔號・絶止號・勘驗號・勾銷號・圖解號」である。このほかにも、字の讀音を示す記號もある。これらの符號には後世の評點符號と同じか類似のものもある。最初期の文學評點は、『古文關鍵』『文章正宗』『文章規範』にせよ、また劉辰翁批點の詞集或いは小説にせよ、「點」の側面からいえば、やはり單純な圈點しかなく、前代の評點符號と密接にかかわつてゐた。

評點の中には、さまざまな色の筆で點を加えてさまざまな意義を示したものがあつたが、それにも由來がある。甲骨

文の中には、すでに朱墨二種の筆で字を書き、それから彫りつけたものがある。傳孔安國『古文孝經孔氏傳』序には、「朱以發經、墨以起傳、庶後學者睹正誼之有在也。(朱は以て經を發し、墨は以て傳を起す、後の學ぶ者の正誼の在るを睹るを庶うなり)」と云う。三國の董遇は、「善『左氏傳』、更爲作朱墨別異。(『左氏傳』を善くし、更に爲に朱墨の別異を作る)」と云う(『三國志』王肅傳裴松之注引『魏略』)。これらは經籍に訓解を加える際に用いたものである。また、『顏氏家訓』勉學に、「讀天下書未徧、不得妄下雌黃。(天下の書を讀みて未だ徧ねかざれば、妄りに雌黃を下すを得ず)」と云う。これは文字の校訂に用いた例である。『史通』點煩篇には、「昔陶隱居『本草』、藥有冷熱味者、朱墨點其名。阮孝緒『七錄』、書有文德殿者、丹筆寫其字。由是區分有別、品類可知。(昔し陶隱居『本草』は、藥には冷熱味なる者有りて、朱墨もて其の名を點す。阮孝緒『七錄』は、書に文德殿なる者有りて、丹筆もて其の字を寫す。是に由りて區分し別有れば、品類知るべし)」と云う。これは分類のために用いたものだ。齊梁以後、こうした例はかなり廣まっていたが、ほ

とんどが人目を引くためのものであった。道教の文獻の中にも例は見られ、陶弘景『真誥』卷十九「翼眞檢第一」には、「『真誥』中凡有紫書大字者、皆隱居別抄取三君手書。……有朱書細字者、悉隱居所注、以爲誌別。其墨書細字、猶是本文眞經始末。(『真誥』中に、凡そ紫書大字なる者有るは、皆な〔陶〕隱居の別に三君〔許謐・許翹・楊羲〕の手書を抄取せしもの。……朱書細字なる者有るは、悉く隱居の注する所にして、以て別を誌すと爲す。其の墨書細字なるものは、猶お是れ本文眞經の始末なり)」と云う。唐の陸德明『經典釋文敍錄』條例には、「今以墨書經本、朱字辯注、用相分別、使較然可求。(今ま經本を墨書し、辯注を朱字するを以て、用て相い分別し、較然として求むべからしむ)」とある。宋人が書物を讀むのに、朱墨の筆を多く用いたというのは、このような學風を繼承したもので、朱熹・黃榦・何基・王柏等みなそうであった。程瑞禮『讀書分年日程』卷二には、『勉齋批點四書例』を引き、その中の「點抹例」に云う、

紅中抹(一本作黃旁抹)

網・凡例

紅旁抹

警語・要語

紅點

字義・字眼

黑抹

考訂・制度

黑點

補不足

ここに見られる點や抹は、實はすでに一種の評點となっている。というのもこれには批評と鑑賞という二つの性格が備わっているからだ。このやり方は王栢にも繼承された。

文學評點がさまざまな色の筆で表示されるのは、恐らく謝枋得に始まる。『讀書分年日程』卷二「評點韓文凡例」では自ら「廣疊山法」と稱しているが、その中で述べられているのは、黒・紅・黄・青の四色の筆を、截・抹・圈・點に用いるというものである。後世最も著名なのは、もちろん方苞評『史記』であろう。錢泰吉『曝書雜記』卷中に云う、

震川（方苞）評點『史記』、自爲例意。略云、硃圈點處、總是意句與敘事好處。黃圈點處、總是氣脈。硃圈點者人易曉、黃圈點者人難曉。黑擲是背理處、青擲是

不好要緊處、硃擲是好要緊處、黃擲是一篇要緊處。

震川（方苞）は『史記』に評點し、自ら例意を爲る。

略ぼ云えらく、硃圈點の處は、總て是れ意句と敘事との好處。黃圈點の處は、總て是れ氣脈。硃圈點なる人は曉り易きも、黃圈點なる人は曉り難し。黑擲は是れ理に背く處、青擲は是れ要緊す好からざる處、硃擲は是れ要緊す好き處、黃擲は是れ一篇の要緊なる處。ざつと比べただけで、評點符號と章句符號が一つの流れにあることが見て取れよう。

章句の學は漢代に到ると傳注というかたちに發展した。

これは經義が理解しがたくなって、符號のほかに説明を加える必要に迫られたからである。漢代の講經の方法には、條例・章句・訓詁の三つがあった。『後漢書』鄭興傳に云う、

晚善『左氏傳』、……天鳳中、將門人從劉歆講正大義、

歆美興才、使撰條例・章句・傳詁。

晩に『左氏傳』を善くす、……天鳳中、門人を將い劉歆に従い大義を講正す、歆興の才を美とし、條例・章句・傳詁を撰ぜしむ。

この三つは、確かにどれも儒家の經典を講解するためのものであるが、方法は同じではない。訓詁は經の字義を解釋することを主とし、章句は經の文義を解釋することを主とし、條例はおもに經文の凡例を歸納し、それによって經義を理解したのである。^⑨當時の章句は、主として博士が弟子に對して行なう口説を後に書き記して定文とした。口頭で解説したものであるからには、詳細であることが求められ、そこですます言葉が費やされていた。所謂「一經説至百餘萬言（一經説きて百餘萬言に至る）」（『漢書』儒林傳贊）、「説五字之文、至二三萬言。（五字の文を説きて、二三萬言に至る）」（『漢書』藝文志）である。そのため前漢末年にはすでにこうした學風への批判が始まっていた。後漢末に到ると、學問の流れは博古通今・通理究明を求めるものへと變わり始めた。晉人は漢代の章句の學問の展開を繼承する一

方で、佛經の疏鈔の影響も受け、そうして儒家の經典解釋の中に義疏の學問が流行し始めたのである。^⑩

『四庫全書總目』卷一八七『崇古文訣』提要に云う、「宋人多講古文、而當時選本存於今者、不過三、四家。（宋人は多く古文を講ずれども、當時の選本の今に存する者は、三四家に過ぎず）」と、すなわち呂祖謙『古文關鍵』、樓昉『崇古文訣』、眞德秀『文章正宗』そして謝枋得『文章規範』である。いまこれらの書物によって、評點という觀點から漢晉以來の經疏の學問を見てみると、注目すべき數點が浮かびあがる。

まず、章段を分けることについて。趙岐は『孟子章句』を著して、卷頭の「孟子題辭」に云う、

於是乃述己所聞、證以經傳、爲之章句。具載本文、章別其旨、分爲上下、凡十四卷。

是に於て乃ち己の聞く所を述べ、證するに經傳を以てし、之が章句を爲す。具さに本文を載せ、其の旨を章別し、分けて上下と爲し、凡そ十四卷。

「其の旨を章別し」というのは、一方では章段を分かち、

一方では「章指」を立てること。錢大昕『十駕齋養新錄』卷三「孟子章指」條に云う、

趙岐注『孟子』、每章之末、括其大旨、間作韻語、謂之「章指」。『文選注』所引趙岐『孟子章指』是也。

趙岐は『孟子』に注し、每章の末に、その大旨を括り、間ま韻語を作り、之を「章指」と謂う。『文選注』引く所の趙岐『孟子章指』は是れなり。

佛教の義疏はとりわけ段・重（すなわち段落）を分かつことを重視する。これは佛門にあつては恐らくそれ自身の傳統を有するのであるが、中國の佛經において章段を分かつ傳統は、道安に始まるもので、それは儒家の章句の學問の影響を受けたものとも考えられる^①。しかし、佛教義疏が章を分かつただけではなく一歩進んで段をも分かつことは、やはりそれ自身の特色が有つて、それが逆に儒家の義疏へも影響を及ぼすこととなる。皇侃『論語集解義疏』は「學而」篇の篇目の疏に云う、

論語は此書總名、學而爲第一篇別目。中間講說、多分爲科段矣。

評點 遡源（張）

論語は是れ此の書の總名、學而は第一篇の別目たり。中間の講說は、多く分かちて科段を爲すなり。

「學而時習之」の疏に云う、

就此一章、分爲三段。自此至「不亦悅乎」爲第一、

……又從「有朋」至「不亦樂乎」爲第二、……又從「人不知」訖「不亦君子乎」爲第三。

此の一章に就きて、分かちて三段と爲す。此れ自り

「不亦悅乎」に至るを第一と爲し、……又た「有朋」

從り「不亦樂乎」に至るを第二と爲し、……又た

「人不知」從り「不亦君子乎」に訖るを第三と爲す。

またその『禮記義疏』は、「禮運篇」を四段に分ち、孔穎達『周易正義』では乾卦「文言」を六節に分けて疏を施した。『尚書正義』は「洪範」の「二五事」を三段に分けて疏を施し、『毛詩正義』では「關雎」序の「關雎は后妃の德なり」を十五節に分けて疏を施した。章段を分けるのが義疏體の通則となつていたことが見てとれよう。

宋人が諸書に評點するにも、分段はよく行なわれた。例えば、呂祖謙『古文關鍵』卷上は韓愈「獲麟解」を評して

「反覆作五段說」^⑫といい、「師說」を評しては「最是結得段段有力」、柳宗元「桐葉封弟辨」を評して、「一段好如一段」という。謝枋得『文章規範』卷二では、柳宗元のこの篇を評して「七節轉換、義理明瑩」といい、その卷六には韓愈「送浮屠文暢師序」に對して、しばしば「此一段最高」「此一段義理最精」「此一段尤切近人情」などの語で評している。金聖歎評『西廂記』にいたると、全體を十六章に分ち、さらに第一章の「老夫人開春院」を十五節に分ち、一つ一つに評點を加えている。このように章段に分かつ評點方式は、經典義疏の學問の影響を受けたものとすべきだろう。

評點では、時に文章の末尾に數語を費やしてその主旨を總括することがある。『文章正宗』卷一「周襄王不許晉文公請隧」の末尾の批に云う、

愚按、此篇要領在「班先王之大物以賞私德」一語。

愚按ずるに、此の篇の要領は「先王の大物を班^わち以て私德を賞す」の一語に在り。

また、卷七の賈山『至言』末尾に云う、

按山此書專規帝與近臣射獵而已、何至借秦爲諭。蓋秦亡養老之義、亡輔弼之臣、亡進諫之士、故窮奢極欲、陷於危亡而不自知。文帝雖未至是、然不與近臣圖議政事、而與之毆馳射獵、則佞幸進而侈欲滋、其蹈秦之失有不難者、此忠臣防微之論。

按ずるに山の此の書は専ら帝と近臣との射獵を規すのみ、何ぞ秦を借りて論と爲すに至らん。蓋し秦に養老の義亡く、輔弼の臣亡く、進諫の士亡く、故に奢を窮め欲を極め、危亡に陥りて自ら知らず。文帝未だ是れに至らずと雖も、然るに近臣と政事を圖議せずして、之と射獵に毆馳すれば、則ち佞幸進みて侈欲滋く、其の秦の失を蹈むに難からざる有るは、此れ忠臣 微を防ぐの論なり。

また謝枋得『文章軌範』卷三蘇軾「秦始皇扶蘇論」末尾に云う、

此論主意有兩、說（李）斯（趙）高矯詔立胡亥、殺扶蘇・蒙恬・蒙毅、其禍不在於蒙毅之去左右、而在於始皇之用趙高、後世人主用宦官者、當以爲戒。一說李

斯・趙高敢於矯詔殺扶蘇・蒙恬、而不憂二人之復誦者、其禍不在於斯・高之亂、而在於商鞅之變法、始皇之好殺、後世人主果於殺者、當以爲戒。前一段說始皇罪在用趙高、附入漢宣任恭・顯事、後一段說始皇之果於殺、其禍反及其子孫、附入漢武殺戾太子事、此文法尤妙。此の論の主意に兩つ有り、(李)斯・(趙)高 詔を矯げて胡亥を立て、扶蘇・蒙恬・蒙毅を殺す、其の禍は蒙毅の左右を去るに在らずして、始皇の趙高を用うるに在り、後世の人主の宦官を用うる者、當に以て戒と爲すべしと説く。一に李斯・趙高 敢て詔を矯げて扶蘇・蒙恬を殺す、而るに二人の復た請うを憂えざるは、其の禍は斯・高の亂に在らずして、商鞅の法を變じて、始皇の殺すを好むに在り、後世の人主の殺を果む者、當に以て戒と爲すべしと説く。前一段は始皇の罪は趙高を用うるに在るを説きて、漢宣の恭・顯〔弘恭・石顯〕に任ずる事に附入す、後一段は始皇の殺を果み、其の禍は反て其の子孫に及ぶを説きて、漢武の戾太子を殺す事に附入す、此れ文法尤も妙なり。

これらは、一篇の末尾に大意を總括する評點法で、趙岐が『孟子章指』を著して、「每章の末に、其の主旨を括」つた方法である。

その次が開題(或いは發題)である。佛門の講經には開題が多い。『高僧傳』卷四「竺法汰傳」では、晉の簡文帝が汰に「放光明經」を講じろのを請い、開題大會を開き、皇帝も行幸された、という記事を載せる。『廣弘明集』卷一九には「發般若經題」の一文があるし、『梁書』武帝紀には、「中大通五年」二月癸未、行幸同泰寺、設四部大會。高祖升法座、發「金字摩訶波若經」題、訖于己丑。(中大通五年)二月癸未、同泰寺に幸し、四部大會を設く。高祖 法座に升り、「金字摩訶波若經」題を發し、己丑に訖る」とある。佛教義疏體の影響を受けて以後は、儒家の講經も開題を重視するようになったこと、『陳書』儒林傳に「簡文在东宮、出士林館、發『孝經』題。(簡文 東宮に在り、士林館に出で、『孝經題』を發す)、さらに「周弘正在國學發『周易』題。(周弘正 國學に在りて『周易』題を發す)」というごとくである。玄道を談論するのにも、發題は重視された。『陳書』

馬樞傳に、梁の邵陵王蕭綸が「自講『大品經』、令樞講『維摩』『老子』『周易』、同日發題。(自ら『大品經』を講じ、樞に『維摩』『老子』『周易』を講ぜしめ、同日 題を發す)」とある。『隋書』經籍志には、開題の書として、梁蕃『周易開題義』十卷・梁武帝『毛詩發題序義』一卷・梁『春秋發題義』一卷を著録するし、『舊唐書』經籍志では、『周易發題義』一卷・梁武『周易開題論序』十卷・大史叔明『孝經發題』四卷などを著録し、開題を重視するのが晉宋以來の經疏の通例となつていたことがわかる。『廣弘明集』卷十九の記載によると、中大通五年二月二十六日の講經では、まず都講积園寺法彪が『摩訶般若波羅蜜經』と題を唱えて、ついで梁武帝から題を發して、云う、

……名摩訶般若波羅蜜、此是天竺音、經是此土語。外國名為修多羅、此言法本。具含五義、一出生、二湧泉、三顯示、四繩墨、五結鬘。訓釋經字亦有三義、一久、二通、三由、久者名不變滅、是名為久。^⑭

……摩訶般若波羅蜜と名づくるは、此れ是れ天竺の音にして、經は是れ此の土語なり。外國 名づけて修多

羅と爲すは、此れ法の本を言う。五義を具含し、一に出生、二に湧泉、三に顯示、四に繩墨、五に結鬘なり。經字を訓釋するに亦た三義有り、一に久、二に通、三に由、久なる者は名の變滅せざる、是れ名づけて久と爲す。

皇侃の『論語集解義疏序』は「論語」という二文字を解釋するのに、發題と同じ形式を採用している。

凡通論此「論」字、大判有三途。第一舍字制音、呼之爲倫。一舍音依字、而號曰論。一云倫・論二稱、義無異也。第一捨字從音爲倫、說者乃衆、的可見者、不出四家。一云倫者次也、言此書事義相生、首末相次也。二云倫者理也、言此書中蘊含萬理也。三云倫者綸也、言此書經綸今古也。四云倫者輪也、言此書義旨周備、圓轉無窮、如車之輪也。第二舍音依字爲論者、言此書出自門徒、必先詳論、人人僉允、然後乃記、記必已論故曰論也。第三云倫、論無異者、蓋是楚夏音殊、南北語異耳。……音字雖不同、而義趣猶一也。

凡そ此の「論」字を通論するに、大判に三途有り。第

一に字を捨て音を制し、之を呼びて倫と爲す。一に音を捨てて字に依りて、號して論と曰う。一に云えらく倫・論の二稱、義に異なる無きなり。第一に字を捨て音に従いて倫と爲すは、説く者乃ち衆あひけれど、的あてかに見るべき者は、四家を出でず。一に云えらく倫なる者は次なり、言うところは此の書に事義相い生じ、首末相い次ぐなり。二に云えらく倫なる者は理なり、言うところは此の書中に萬理を蘊含するなり。三に云えらく倫なる者は論なり、言うところは此の書 今古を経綸するなり。四に云えらく倫なる者は輪なり、言うところは此の書の義旨周備し、圓轉無窮なること、車の輪の如きなり。第二に音を捨て字に依りて論と爲す者、言うところは此の書は門徒自り出で、必ず詳論を先にし、人人僉允し、然る後に乃ち記し、記せば必ず已に論あり、故に論と曰うなり。第三に倫・論異なる無きと云う者は、蓋し是れ楚夏の音殊なり、南北の語異なるのみ。……音字は同じからずと雖も、而るに義趣猶お一なるがごときなり。

たとえ漢代以來の儒家の經說中に類似的の解題があり、例えば孔穎達『周易正義』「論易之三名」に「易緯・乾鑿度」云、易一名而含三義、所謂易也、變易也、不易也。……鄭玄依此作『易贊』及『易論』云、易一名而含三義。易簡、一也、變易、二也、不易、三也。『易緯』乾鑿度に云う、易は一名にして三義を含む、所謂の易なり、變易なり、不易なり。……鄭玄 此に依りて『易贊』及び『易論』を作りて云う、易の一名には三義を含む、易簡、一なり、變易、二なり、不易、三なり」と云うにしても、多くは比較的簡略なものであつて、それに對して佛家の經疏の開題は篇章を連ねるもので、そのためにこれ以後の儒家の義疏もしばしばそうなったのである。

後世の評點では、文章題の下に數語を書き付け、解題に類似することがよくある。例えば『古文關鍵』卷下の曾鞏「唐論」の題下に云う、

此篇大意、專說太宗精神處。

此の篇の大意、専ら太宗の精神の處を説く。

また、『崇古文訣』卷三の賈誼「弔屈原賦」の題下に云う、

誼謫長沙、不得意、投書弔屈原、而因以自論、然議議時人太分明。其才甚高、其志甚大、而量亦狹矣。

誼 長沙に謫せられて、意を得ず、書を投じて屈原を弔い、而して因りて以て自ら論す、然れども時人を議論すること太だ分明なり。其の才甚だ高く、其の志甚だ大なれども、量は亦た狹きなり。

また、『文章軌範』卷一「放膽文」の下に云う、

凡學文、初要膽大、終要小心小。由粗入細、由俗入雅、由繁入簡、由豪蕩入純粹。此集皆粗枝大葉之文、本於禮義、老於世事、合於人情。初學熟之、開廣其胸襟、發舒其志氣、但見文之易、不見文之難、必能放言高論、筆端不窘束矣。

凡そ文を學ぶには、初めは膽の大きさを要し、終りは心の小なるを要す。粗より細に入り、俗より雅に入り、繁由り簡に入り、豪蕩由り純粹に入る。此に集むるは皆な粗枝大葉の文にして、禮義に本づき、世事に老け、人情に合す。初學之に熟せば、其の胸襟を開廣し、其の志氣を發舒す、但だ文の易きを見て、文の難きを

見ざれば、必ず能く放言高論するも、筆端窘束せず。方回『瀛奎律髓』は、唐宋の五七言律詩を四十九類に分けて收め、各類の下に、それぞれ數語を記し、それが解題となっている。卷三「懷古類」に云う、

懷古者、見古迹、思古人、其事無他、興亡賢愚而已。可以爲法而不之法、可以爲戒而不之戒、則又以悲夫後之人也。齊彭・殤之修短、忘堯・桀之是非、則異端之說也。有仁心者必爲世道計、故不能自默於斯焉^⑮。

懷古なる者は、古迹を見、古人を思い、其の事他無し、興亡賢愚あるのみ。以て法と爲すべくも之に法らず、以て戒めと爲すべくも之を戒めとせざれば、則ち又た以て夫の後の人を悲しましむるなり。彭・殤の修短に齊び、堯・桀の是非を忘るるは、則ち異端の説なり。仁心有る者は必ず世道の爲に計る、故に自ら斯に黙する能わず。

金聖歎が『西廂記』を評するに至っても、その評の書出しに、

『西廂』者何。書名也。書曷爲乎名曰『西廂』也。書

以紀事、有其事、故有其書也、無其事、必無其書也。

今其書有事、事在西廂、故名之曰『西廂』也。

『西廂』なる者は何ぞや。書の名なり。書爲なすれぞ名

づけて『西廂』と曰うや。書は以て事を紀す、其の事有れば、故に其の書有り、其の事無ければ、必ず其の書無きなり。今ま其の書に事有り、事は西廂に在り、故に之に名づけて『西廂』と曰うなり。

(『貫華堂第六才子書西廂記』卷之四)

と云い、開題の格式はなお維持されている。さらに注目すべきは、これが問答形式で展開されていることで、恐らく儒佛の傳疏の文から示唆を受けたものであらう。¹⁶⁾

要するに、評點は符號から書式へと發展し、章句の學問の影響を多く受けた、ということ。ここまで遡ってこそ、本源を探る議論を始められるのだ。

二 論文と評點

文を論じる著作は曹丕の『典論』論文に始まる。文を論じる著作と評點とを結びつけたのは、章學誠の『文史通

義』に始まり、のちに曾國藩も同様の考えを示した(前出)。評點が「評」と「點」との結合であるからには、もちろんその「評」の淵源をたどらねばならない。

錢鍾書『管錐編』は陸雲の「兄平原に與うる書」を評して、「什九論文事、著眼不大、著語無多、詞氣殊肖後世之評點或批改、所謂『作場或工房中批評』(workshop criticism)也。……苟將雲書中所論者、過錄於(陸)機文各篇之眉或尾、稱賞處示以朱圍子、刪削處示以墨勒帛、則儼然詩文評點之最古者矣。¹⁷⁾(什に九は文事を論ず、著眼大きからず、著語多く無し、詞氣殊に後世の評點或いは批改に肖て、所謂『作場或いは工房中の批評』(workshop criticism)なり。……苟し雲の書中に論ずる所の者を將て、過して(陸)機の文各篇の眉或いは尾に録し、稱賞の處は示すに朱圍子を以てし、刪削の處は示すに墨勒帛を以てすれば、則ち儼然として詩文評點の最も古き者なり)」と云う。實は『左傳』襄公二十九年に、吳の公子季筓が周樂を觀て『周南』から「頌」まで評論を加えた記事があり、かりにそれぞれを『詩經』諸國風・雅・頌の冒頭に移せば、それで評點となる。『論語』に記される孔

子の『詩』への評論、例えば、「詩三百、一言以て之を蔽えば曰く、思ひ邪ま無し、と」(爲政篇)を、かりに巻首に移せば、『詩經』の總評となる。「鄭聲は淫なり」(衛靈公篇)を「鄭風」の下に置けば、一國風への總評となる。

「關雎」は樂しみて淫ならず、哀しみて傷まず」(八佾篇)を「關雎」の下に移せば、それは一詩への總評となる。

『毛詩』には大序があり、小序がある。「序」の役割は、もともと作意を述べ明かすもので、それが全書の冒頭か一篇の始めに置かれて、一書あるいは一詩の「大旨」の説明となる。後世の評點も、しばしばこうした内容を含む。王逸の『楚辭章句』も、やはり一篇ごとに序がある。もちろん、これらに見られる議論はどうしても大まかにくくるものになりがちである。魏晉以降、文章を専門に論じる著述が現れると、當時の人は、專論を著して文學への考えを述べるだけではなく、書信や序跋また談論の中においても、しばしば文學評論に及ぶようになった。一書をなした專著としては、まず『文心雕龍』と『詩品』を挙げねばなるまい。『詩品』はまたの名を『詩評』といったが、同じ時期

に湘東王蕭繹にも『詩評』の著作があった。¹⁹⁾ 詩人の詩作の品評となると、やはり誰その何某という作品について論ずることが多く、『詩品』は班姬について「團扇」短章、詞旨清捷、怨深文綺、得匹婦之致。「團扇」の短章は、詞旨清捷たり、怨は深く文は綺、匹婦の致を得たり」(巻上)と評し、阮籍は「詠懷」之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之内、情寄八荒之表、洋洋乎會於風雅。「詠懷」の作、以て性靈を陶し、幽思を發すべし。言は耳目の内に在り、情は八荒の表に寄せ、洋洋として風雅に會す」(同前)と評し、袁宏は「詠史」、雖文體未適、而鮮明緊健、去凡俗遠矣。「詠史」、文體未だ適からずと雖も、鮮明緊健にして、凡俗を去ること遠し」(巻中)と評す。また詩の一句について評するものもあり、張翰・潘尼について「季鷹「黃華」之唱、正叔「綠繁」之章、雖不具美、而文彩高麗、竝得虬龍片甲、鳳凰一毛。(張)季鷹「黃華」の唱、「潘」正叔「綠繁」の章、美を具えずと雖も、文彩高麗にして、竝びに虬龍の片甲、鳳凰の一毛を得」(巻中)と評し、陶淵明について「歡言酌春酒」「日暮天無雲」、風華清靡、豈直爲田家語耶。(歡言して春

酒を酌み」「日暮 天に雲無し」は、風華清靡にして、豈に直だ田家の語爲らんや」(巻中)と評す。唐代以降は詩格が流行し、作者も詩句を擧げて格式とするようになる。同時に、唐人の專集も大いに發達し、その中にも評論が見られるようになる。宋代になって詩話が興ると、評論の作も、陸續と編まれるようになる。評點の「評」は、つまりこのような基礎の上に發展してきたのである。

歷代の文章論の著作と評點の關係を調べていくと、文章論それ自身の發展のほかに、唐代以降いくつか注目すべき文學批評の現象が生じていることに氣づく。

第一に、詩格と評點。詩格は、唐代以降いちじるしく流行した一つの批評形式であるが、中唐になると、詩格のなかでも「勢」が好んで論じられるようになった。とりわけ「勢」の名稱に四字一組の形象語を冠することが多いこと、「獅子返擲勢」、「猛虎跳澗勢」、「毒龍顧尾勢」などのごとくである。詩格において論じられるこれらさまざまな「勢」は、具體的な文學批評として行われ、實質的には詩歌中の句法の問題を指摘の對象とした。宋代に至ると、文

學創作と批評における「法」ということに人々の興味が集まる。古典詩歌が發展して晉宋時代に至ると、「佳句」「秀句」が重視され始め、批評面でも「句を選んで褒貶を加える」方式が廣まったが、これは詩歌の創作と批評において、章を重視する『詩經』のあり方から、一聯を重視する五七言詩のあり方へと轉換を遂げたことを示す。「句法」の初出は杜甫の詩で、「高三十五書記に贈る」詩に「美名人不及、佳句法如何(美名人及ばず、佳句法は如何)」と云う。王安石が杜詩の句法に深く共鳴したことは、『唐子西文錄』に「王荊公五言詩、得子美句法(王荊公の五言詩、子美の句法を得)」といい、また『苕溪漁隱叢話』前集卷三十六にも「半山老人「題雙廟詩」云、「北風吹樹急、西日照窗涼。」……此深得老杜句法。(半山老人「雙廟」題する詩」に云う、「北風 樹を吹いて急なり、西日 窗を照らして涼たり」……此れ深く老杜の句法を得たり」という。杜甫は宋代の詩人の新しい手本の一つであり、この新しい手本の確立には、王安石・黃庭堅がもつとも大きく與っている。黃庭堅及び江西詩派が杜甫を祭り上げたときに中心としたのは「句

「法」であつた。黃庭堅は自らの詩文の中で何度も「句法」という語を用いている。例えば「句法清新俊逸、詩源廣大精神（句法は清新にして俊逸、詩源は廣大にして精神あり）」（再用前韻贈高子勉）、「傳得黃州新句法、老夫端欲把降幡（傳え得たり 黃州の新句法、老夫端に降幡を把らんと欲す）」（次韻文潛立春日三絕句）之二、「其作詩淵源、得老杜句法（其の作詩の淵源、老杜の句法を得たり）」（答王子非書）など。これよりのち、「句法」は宋代詩學の中心的概念の一つとなつた。『彥周詩話』は「句法を辨ずる」ことこそ詩話が定める最も重要な内容とし、黃庭堅が提唱した「點鐵成金」も、その核心は「句法」にあつた。范溫「詩眼」はその意を受けて「句法以一字爲工、自然穎異不凡、如靈丹一粒、點鐵成金也。（句法は一字を以て工と爲し、自然に穎異不凡なること、靈丹の一粒、鐵を點して金と成すが如きなり）」と云い、『詩人玉屑』卷三および四では、「句法」「唐人句法」「宋朝警句」「風騷句法」などを專論する。理論自體の發展からみると、「句法」は、唐五代の詩格において討論されてきた問題に沿つて發展を遂げており、それゆえ、四

字一組の形象語の形式をとることが多い。例えば『詩人玉屑』卷四「風騷句法」には、「萬象入壺」「重輪倒影」「新月驚鰲」「衣袂乘龍」などの名稱が見られ、そのなかには唐五代の詩格に用いられた「勢」の名稱ときわめて類似したものもあること、「孤鴻出塞」「龍吟虎嘯」「碧海求珠」などのごとくで、同じ流れに屬することがわかる。詩歌では「句法」が強調され、文章では「文法」「章法」が強調される。陳騷『文則』などは作文の法則を強調するものだが、そのうち「己」部七條は、専ら句法と章法を論ずる條である。宋代の評點書にしても、纏まりがないかに見える評論において、實際には「法」への追及と重視に意が注がれているのである。『古文關鍵』卷頭の「總論」では、「看文字法」「看韓文法」「看柳文法」「看歐文法」「看蘇文法」「看諸家文法」「論作文法」などの項目があり、『文章軌範』も諸家の文章に對する評論においてとりわけ「句法」と「章法」を重視する。例えば卷一には韓愈の「上張僕射書」を評して「連下五個「如此」字、句法長短錯綜凡四變、此章法也。（連ねて五個の「如此」字を下す、句法の長短錯綜す

ること凡そ四變、此れ章法なり」「又連下三個「如此」字、長短錯綜、此章法也。（又た連ねて三個の「如此」字を下し、長短錯綜す、此れ章法なり）」「此三句無緊要、句法亦不苟且（此の三句緊要無く、句法も亦た苟且ならず）」と云う。陳振孫「崇古文訣序」も「昔人所以爲文之法備矣（昔人所以に文を爲るの法備われり）」という語を以てこの書を推獎する。このような關心は、文學批評の觀點からすると、明らかに唐五代の詩格の繼承と言えよう。元の程端禮『讀書分年日程』卷二「批點韓文凡例」は、注に「廣疊山法」とあり、謝枋得（疊山）を受けてさらに増訂を加えたものであることがわかる。その中に以下のような説明が見られる。

一、大段意盡、黑畫截。於此玩篇法。（大段の意の盡くるところは、黑畫もて截す。此に於て篇法を玩う。）

一、大段内小段、紅畫截。於此玩章法。（大段内の小段は、紅畫もて截す。此に於て章法を玩う。）

一、小段内細節目、及換易句法、黃半畫截。於此玩句法。（小段内の細節目、及び句法を換易するは、黃半畫もて截す。此に於て句法を玩う。）

それぞれの符號がそれぞれの意味を示すのだが、重視したのは「法」であつた。明清の小説評點に至つても、やはり「法」は重視される。例えば、金聖歎評點『水滸傳』には、「水滸傳」章有章法、句有句法、字有字法。……看得「水滸傳」出時、他書便如破竹。（『水滸傳』は章に章法があり、句に句法があり、字に字法がある。……『水滸傳』がわかれ、他の本は竹を割るように簡単に理解できる）と云い、また、「此本雖是點閱得粗略、子弟讀了、便曉得許多文法。不惟曉得『水滸傳』中有許多文法、他便將『國策』・『史記』等書、中間但有若干文法、也都看得出來。（此の本はおおざっぱに評點してあるが、子弟が通讀すれば、多くの文法が理解できよう。『水滸傳』に多くの文法があるのがわかるだけでなく、『戰國策』『史記』など他の書物は、そのなかにいささかの文法があるだけなのが、すべて見えてくるだろう）」（『第五才子書施耐庵水滸傳』卷三「讀第五才子書法」と云う。また章學誠『文史通義』古文十弊は云う、

古人文成法立、未嘗有定格也。傳人適如其人、述事適如其事、無定之中、有一定焉。……法度難以空言、則

往、往、取、譬、以、示、蒙、學、擬、於、房、室、則、有、所、謂、間、架、結、構。擬於身體、則有所謂眉目筋節。擬於繪畫、則有所謂點睛添毫。擬於形家、則有所謂來龍結穴。隨時取譬、然爲初學示法、亦自不得不然。

古人は文成り法立つも、未だ嘗て定格有らざるなり。

人を傳うれば其の人の如くに適い、事を述ぶれば其の事の如くに適う、定無きの中、一定なる有り。……法度は以て空言し難ければ、則ち往往にして譬を取りて以て蒙學に示す、房室に擬せば、則ち所謂の間架結構有り。身體に擬せば、則ち所謂の眉目筋節たる有り。

繪畫に擬せば、則ち所謂の點睛添毫なる有り。形家に擬せば、則ち所謂の來龍結穴なる有り。時に隨いて譬を取る、然して初學の爲に法を示す、亦た自ら然らざるを得ず。

そういうわけで、評點家は「文法」を論ずるさい、形象語を用いることが多いこと、まさに唐五代の詩格に見られる「勢」の名稱と同様なのである。例えば金聖歎『讀第五才子書法』卷三は『水滸傳』中の「許多文法、非他書所曾

有。(多くの文法は、他の書物にはこれまでなかったものだ)」として「草蛇灰線法」「錦針泥刺法」「背面傳粉法」「横雲斷山法」「鸞膠續弦法」等の名稱を挙げ、これらは後になつて毛宗崗評『三國演義』および脂硯齋評『紅樓夢』に引き繼がれ、後者は第一回の眉批中に記して云う、

事則實事、然亦敘得有間架、有曲折、有順有逆、有映帶、有隱有見、有正有閏。以至草蛇灰線、空谷傳聲、一擊兩鳴、明修棧道、暗度陳倉、雲龍霧雨、兩山對峙、烘雲托月、背面傳粉、千皴萬染諸奇、書中之祕法亦復不少、予亦於逐回中搜剔剝剖、明白注釋、以待高明、再批示謬誤。

事は則ち實事にして、然るに亦た敘べ得て間架有り、曲折有り、順有り逆有り、映帶有り、隱るる有り見わする有り、正有り閏有り。以て草蛇灰線、空谷傳聲、一擊兩鳴、明修棧道、暗度陳倉、雲龍霧雨、兩山對峙、烘雲托月、背面傳粉、千皴萬染の諸奇に至れば、書中の祕法亦た復た少なからず、予亦た回中を逐いて搜剔剝剖し、明白に注釋す、以て高明の、再び批して謬

誤を示すを待たん。^②

まとめれば、詩格が評點に與えた影響は、「句法」「章法」「文法」への關心と、四字一組の形象語を用いて「句法」と「文法」に形容を加えたことにある。

第二に、選集と評點。『隋書』經籍志の說に従えば、選集は摯虞に始まる。すなわち「苦覽者之勞倦、於是採摘孔翠、芟剪繁蕪、自詩賦下、各爲條貫、合而編之、謂爲『流別』」。(覽る者の勞倦を苦しみ、是に於て孔翠を採摘し、繁蕪を芟剪し、詩賦自り下りて、各おの條貫を爲し、合して之を編み、謂いて『流別』と爲す)。選集には優劣の基準が内包され、つまり文學批評の機能を持つのは、このとき始まっていたわけだ。唐以前の選集のうち、ほぼ完全に傳えられるものは『文選』と『玉臺新詠』だけで、そのほか摯虞『文章流別集』や李充『翰林論』などは、佚文數則が残存するのみである。これらの文獻から見ると、早期の選集において文學批評がいかに行われているかは、主に序文および選目の多寡あるいはどのような作品を選に入れるかなどを通して體現されている。^③『文章流別集』と『翰林論』にはともに

作家と作品への評論が含まれてはいるが、『隋書』經籍志の著錄から判斷すれば、それらは選集本體とは區別されている。^④章學誠・曾國藩とともに、評點は鍾嶸『詩品』と劉勰『文心雕龍』に始まると指摘した。この考えは誤りではないが、いささか補足が必要で、つまり齊梁の文論は唐人の選集・選注という轉換を経て、評點形式の發生に影響を及ぼしたのである。

唐代の選集は大いに發展し、詩歌の選集に限っても、百三十七種の多きに上る。^⑤敦煌遺書の寫本資料を考慮に入れるなら、その數はさらに増えるはずだ。これら唐人の選集からわかるのは、かれらがこの形式を用いて文學批評を行なう際、前人の繼承を基礎としてさらに新たな創造を加えていることである。選集によっては批評意識が依然として序文の中に集中的に表現されていること、元結『篋中集』序や樓穎『國秀集』序が例となろう。しかしとくに注目に値するのは、評語と選詩を一つに結びつけた形式で、この新しいスタイルは殷璠に始まると考えられるが、ここには選集の批評機能がよく表れている。殷璠は三部の選集を

編纂しているが、そのうち『荊揚挺秀集』は失われ、『丹陽集』には佚文が遺されているが、完全な形で傳わつたのは『河岳英靈集』である。

殷璠『河岳英靈集』二卷には、敘も論もあり、それぞれの詩人の名の下に評語を付す。このような方法は、明らかに鍾嶸『詩品』を受け繼いだものだ。殷璠は「敘」と「論」において「文有神來・氣來・情來、有雅體・野體・鄙體・俗體。（文には神來・氣來・情來有り、雅體・鄙體・俗體有り）」と指摘するとともに、自らが選んだ詩が「既閑新聲、復曉古體、文質半取、風騷兩挾。言氣骨則建安爲傳、論宮商則太康不逮。（既に新聲に閑いて、復た古體を曉り、文質半ば取り、風騷兩つながら挾む。氣骨を言えば則ち建安もて傳と爲し、宮商を論ずれば則ち太康も逮ばず）」と標榜する。これはかれの理解する盛唐詩の特色、つまり風骨・興象・聲律がみな備わっているということである。殷璠はまた選んだ詩人の名の下にそれぞれ評語を記し、そのあとに作品を置くが、これは評論から評點への過渡的形態の典型を示すとしてよい。評論のなかには總評あり、一詩全體を評論す

るものありだが、もつとも多いのは句を選び出して批評するものである。注意すべきは、その評語のスタイルおよび用語が、『詩品』と『文心雕龍』にはなほだ似通っていることである。例えば『河岳英靈集』卷上には常建を評して云う、

高才而無貴仕、誠哉是言。曩劉楨死於文學、左思終於記室、鮑昭卒於參軍、今常建亦淪於一尉。悲夫。

高才にして貴仕無し、誠なるかな。是の言。曩に劉楨は文學に死し、左思は記室に終わる、鮑昭は參軍に卒し、今ま常建亦た一尉に淪す。悲しいかな。

建詩似初發通莊、卻尋野徑、百里之外、方歸大道。所以其旨遠、其興僻、佳句輒來、唯論意表。

建の詩は初め通莊に發するに似れども、卻て野徑を尋ね、百里の外、方に大道に歸せんとす。所以に其の旨は遠く、其の興は僻、佳句輒ち來たり、唯だ意表を論ず。

至如「松際露微月、清光猶爲君」、又「山光悅鳥性、潭影空人心」、此例十數句、竝可稱警策。

「松際 微月を露し、清光 猶お君の爲めなるがごとし」、又「山光 鳥性を悦ばしめ、潭影 人心を空しうす」の如きに至りては、此の例十數句、並びに警策と稱すべし。

然一篇盡善者、「戰餘落日黃、軍敗鼓聲死」、「今與山鬼鄰、殘兵哭遼水」、屬思既苦、詞亦警絕。潘岳雖云能敘悲怨、未見如此章。

然るに一篇にて善を盡くす者は、「戰餘 落日黃たり、軍敗れて鼓聲死す」、「今ま山鬼と鄰りして、殘兵 遼水を哭す」、屬思 既に苦なれば、詞も亦た警絶なり。潘岳能く悲怨を敘すと云うと雖も、未だ此の章の如きを見ず。^②

いま私はこの一段を四節に分けて示したが、第一節はその生平を評し、ちようど『詩品』が古詩を評して「人代冥滅、而清音獨遠。悲夫。（人代冥滅して清音獨り遠し。悲しいかな）」と云い、李陵を評して「有殊才、生命不諧、聲類身喪。（殊才有れども、生命諸^{かな}わず、聲類^ゆれ身喪ぶ）」と云う類である。第二節は詩人の詩を總評するもの、第三節は句を選

んで批評するもので、『詩品』が「五言の警策」を擧げる類にひとしい。第四節は詩の全體を評するが、それも『詩品』が古詩の「客從遠方來」「橘柚垂華實」を擧げ、「亦た驚絶爲り」と述べるがごとくであり、第四節末句は「文心雕龍」誅碑に潘岳を「巧於敘悲」と評するにもとづくであろう。殷璠『丹陽集』は完本ではないが、やはり多くの評語が『詩品』に由來することは佚文から充分わかる。例えば儲光羲詩を「務在直置」と評するのは、『詩品』が陸機詩を「有傷直致之奇」と評するのに由來するし、丁仙芝評の「迴出凡俗」には『詩品』袁宏評の「去凡俗遠矣」、蔡希周評の「殊得風規」には『詩品』何晏評の「風規見矣」、張彦雄評の「不尙綺密」には『詩品』顏延之評の「體裁綺密」、張潮評の「頗多悲涼」には『詩品』曹操評の「甚有悲涼之句」、張暈評の「巧用文字、務在規矩」には『詩品』張華評の「巧用文字、務爲妍冶」がそれぞれ對應するといふぐあいである。それゆえ、のちに殷璠と鍾嶸は竝論されることもなり、毛先舒の『詩辯坻』卷三には「殷璠撰『河岳英靈集』、持論既美、亦工於命詞。可以頡頏記室、

續成『詩品』。(殷璠は『河岳英靈集』を撰じ、持論既に美にして、亦た命詞に工みなり。以て記室に頡頏して、續して『詩品』を成す可し^②)と論じられる。

高仲武『中興間氣集』は、殷璠の影響を受けていて、『四庫全書總目』卷一八六には『河岳英靈集』の例の如し」と指摘する。この兩者はともに二卷からなり、ともに五言詩を主とし、そしてともに人名の下に評論等を付す。しかも選ばれた詩の時期は『河岳英靈集』とちょうど踵を接しており、明らかにその續選という意識があつたと考えられる。ただし高仲武がとくに大曆時期の詩人を推崇したのは、殷璠といささか異なる。さらに高仲武は句を選んでの批評をより重視していて、列擧された佳句もより多い。さらに指摘しておかねばならないのは、この書物が『詩品』の用語を随所で踏襲することで、これは論文から評點に到る過程で起きた轉換の、きわめてはつきりとした痕跡である。表にして兩者を對比しよう。

『詩品』	『中興間氣集』
評謝惠連云、「恨其蘭玉夙凋、故長轡未聘。」	評皇甫冉云、「恨長轡未聘、芳蘭早凋。悲夫。」
評鮑照云、「骨節強於謝混、驅邁疾於顏延。」評江淹、「筋力於王微、成就於謝朓。」	評韓翃云、「其比興深於劉員外、筋節成於皇甫冉也。」
評謝朓云、「善自發詩端。」	評郎士元云、「古人謂謝朓工於發端、比之於今、有慚沮矣。」
評陸機云、「陸文如披沙揀金、往往見寶。」	評崔峒云、「斯亦披沙揀金、往往見寶。」
評謝朓云、「善自發詩端、而末篇多蹟、此意銳而才弱也。」	評劉長卿云、「大抵十首以上、語意稍同、於落句尤甚、思銳才窄也。」
評張協爲上品、張載爲下品云、「孟陽詩、乃遠慚厥弟。」	評皇甫曾云、「昔孟陽之於景陽、詩德遠慚厥弟、協居上品、載處下流。今侍御之於補闕、文辭亦爾。」

選集は文章の選定と評論とを結びあわせはしたが、その評論は作者の名の下に付され、評點が作品もしくは文章に付されるのとは、まだ距離がある。しかし兩者の距離はほ

んの一步であるし、注釋のスタイルは評點と基本的に同じものであった。

唐代の文學注釋として、最も有名かつ最も影響力の強かつたのは『文選注』である。注の書式は、本文を大字で注を小字で記すという形態が多い。大小字に書き分ける書式は經學に由來する。簡牘を用いていた時代に、書きつけるテキストの用途と重要性の違いによって、簡牘の長さや文字の大小に區別があつたことに由來するのである。例えば『六經』は二尺四寸の簡に書かれるが、『孝經』は一尺二寸、『論語』は八寸、『春秋』は二尺四寸、『左傳』はたつたの八寸、というぐあいであつた。^② といふのも、『孝經』『論語』は當時はまだ「經」に數えられず、『左傳』は「傳」だつたからである。王充『論衡』量知篇には「文字大者爲經、小者爲傳記。（文字の大なる者は經と爲し、小なる者は傳記と爲す）」と云う。いま唐代の抄本を見ても、經と傳を一つにするときには、經文を大字に、注文を小字にしている。^③ このようなスタイルは經學に始まり、他の典籍にも影響を及ぼしたが文學もまた然りで、『文選』李善注で

あらうと五臣注であらうと、すべて本文は大字に、注文は小字に作る。後の評點の形式も、やはりこれに従つて發展していった。

注釋はテキストに對する解釋を主とするものだが、そのなかにはしばしば評論的な部分が含まれる。とりわけ、そこに前人の文章論を踏まえたことばがときに見られることには注意する必要がある。李善注『文選』が引用する典籍は、四部に遍くわたり、千九百四十六種の多きに上るが、その中には、曹丕『典論論文』・傅亮『文章志』・摯虞『文章志』『文章流別論』・佚名『文章錄』・李充『翰林論』・江淹『文釋』など、詩文評の著作も含まれる。卷一二木華『海賦』の末尾に「翰林論」を引いて云う、

木氏『海賦』、壯則壯矣、然首尾負揭、狀若文章、亦將由未成而然也。

木氏『海賦』、壯は則ち壯なり、然るに首尾負揭^{ちくはく}するは、狀文章の若きか、亦た將た未だ成らざるに由りて然るか。

また、卷四八揚雄「劇秦美新」題下にも「翰林論」を引い

て云う、

揚子論秦之劇、稱新之美、此乃計其勝負、比其優劣之義。

揚子 秦の劇なるを論じ、新の美なるを稱するは、此れ乃ち其の勝負を計り、其の優劣を比ぶるの義なり。

李善注には鍾嶸『詩品』を用いたところもある。卷二五劉琨「答盧諶詩并書」の「書の」末尾に李善は、

久罹厄運、故述喪亂、多感恨之言也。

久しく厄運に罹り、故に喪亂を述べ、感恨の言多きなり。

と云うが、これは、『詩品』の劉琨評に「琨既體良才、又罹厄運、故善敘喪亂、多感恨之詞。（琨 既に良才を體し、又た厄運に罹る、故に善く喪亂を敘し、感恨の詞多し）」とあるのにもとづいている。李善注自體も、時に評論の成分を含むことがあった。^②後世の評點書の中には、注釋と評點とが互いに結びついたものが見られ、金聖歎『唱經堂杜詩解』・仇兆鼈『杜詩詳注』・楊倫『杜詩鏡詮』等はその例であろう。選集そのものの發展からすれば、こうした情

況は理解しがたいことではない。注釋の成分が多ければ注釋書になり、評論の成分が多いと評論書となるが、著述形式から言えば、兩者にさして違いはない。あるいは選集は具體的かつ徹視的な評點だと言つてよいかもしれない。選集から評點に到るのは、ごく自然な展開であつた。

第三に、詩社と評點。宋元以來、結社の風潮は大いに盛んになつたこと、吳自牧『夢梁錄』卷一九「社會」の條に云う、

文士有西湖詩社、此乃行都搢紳之士及四方流寓儒人、寄興適情賦詠、膾炙人口、流傳四方、非其他社集之比。武士有射弓踏弩社、皆能攀弓射弩、武藝精熟、射放嫻習、方可入此社耳。更有蹴鞠・打毬・射水弩社……諸棊建立聖殿者、俱有社會、諸行亦有獻供之社……諸行市戶、俱有社會、迎獻不一。如府第內官以馬爲社、七寶行獻七寶玩具爲社・又有錦體社・臺閣社・窮富賭錢社・遏雲社・女童清音社・蘇家巷傀儡社・青果行獻時果社・東西馬勝獻異松怪檜奇花社。魚兒活行以異樣龜魚呈獻、豪富子弟緋綠清音社・十閑等社。

文士に西湖詩社有り、此れ乃ち行都指紳の士及び四方流寓の儒人の、興を適情賦詠に寄すものにて、人口に膾炙し、四方に流傳し、其の他の社集の比に非ず。武士に射弓踏弩社有り、皆な攀弓射弩を能くし、武藝精熟、射放嫺習なるは、方に此の社に入るべきのみ。更に蹴鞠・打毬・射水弩社有り。……諸寨に聖殿を建立する者、俱に社會有り、諸行に亦た獻供の社有り。

……諸行の市戸、俱に社會有り、迎獻一ならず。府第の内官に馬を以て社と爲し、七寶行に七寶玩具を獻じて社と爲すが如し。又た錦體社・臺閣社・窮富賭錢社・遏雲社・女童清音社・蘇家巷傀儡社・青果行に獻時果社・東西馬勝に獻異松怪檜奇花社有り。魚兒活行に異様の龜魚を以て呈獻するあり、豪富子弟に緋綠清音社・十閑等社あり。

「社」は宗教活動に起源をもつ。最初は土神の社を祀つたのであったが、その後「社」の範圍と性質は變化し擴大し、東晉には慧遠を代表とする蓮社があつた。「社」はそれ以降も發展を續け、宋代になると様々な仕事と結びつき、

それらがみな「社」を名乗るようになった^③。しかし各種の「社」の中では、詩社が最も重視され、「其の他の社集の比に非ず」というような情況であつた。宋元期に詩社が榮えたのは、一面では結社の風潮が當時さかんであつたことと關わるが、一面ではこうした觀念によつて導かれたものでもあつた。

詩社と評點の關係を考察するには、詩社における詩評に注意しないわけにはいかない。宋元時代の詩社活動の資料にはまとまつたものが少ないが、吳涓編『月泉吟社詩』一卷に據れば、大まかなりともそのありさまがうかがえる。この書物は元の初頭に成立してはいるが、そこに宋代の風潮が反映しているのはまちがいない^④。手順に沿つて見いくと、まず投稿規約があり、それには投稿の時間・方法・地點・題目・題意・詩體が定められている。次いで招かれた評者が品評し、優劣を挙げ、席次を決定し、最後に褒賞を出し、詩集を編集し印刷する。これは宋代の詩社に普遍的なプログラムであつたにちがいない。月泉吟社が評者として招聘したのは方鳳・謝翱・吳思齊三人の科舉試験官で

あつたが、その品評方式を見てみると、まったく評點と同じである。第三位の高字を評して、

前聯妙於紐合、後聯引陶・范、不爲事縛、句法更高。

末借言雜興、的是老手。

前聯は紐合に妙たりて、後聯は陶〔陶淵〕・范〔成大〕

を引き、事の爲に縛られず、句法更に高し。末には借りて雜興を言うは、^{まこと}的に是れ老手なり。

第十四位の喻似之を評して、

語健意深、雖首句疊字、微缺推敲、後聯與末韻過人矣。

語は健に意は深く、首句は字を疊^{かさ}ね、微^{いそ}か推敲を缺くと雖も、後聯と末韻とは人に過ぐ。

第四十八位の感興吟を評して、

此詩無一字不佳、末語雖似過直、若使采詩觀風、亦足以戒聞者。

此詩に一字として佳ならざる無し、末語は直に過ぐるに似たりと雖も、若^{もし}使詩を采りて風を觀れば、亦た以て戒聞とするに足る者なり。

第五十七位の柳州を評して、

二聯見田園分明。第四句最好、「曬」字缺工。

二聯は田園を見わして分明なり。第四句最も好し、

「曬」字は工を缺く。

その「摘句圖」は、起句・聯句・結句に分類して句を列舉する。詩社は文人集團の一つである。文人集團の發生を考えると、漢代の藩王の賓客にまで遡ることができようが、より典型的なのは建安時期の文人集團にちがいない。かれらは集團のリーダーが出す題を受けて詩文を作り、あるいは同じ題で競作し、また互いに討論し、優劣を指摘しあつた。曹植は「世人之著述、不能無病。僕常好人譏彈其文、有不善者、應時改定。（世人の著述、病無き能わず。僕は常に人の其の文を譏彈するを好み、善からざる者有らば、時に應じて改定す）」（與楊德祖書）、『文選』卷四十二と云い、曹丕の「典論論文」や「與吳質書」にも當時の文人に對する評論が見られる。文人が集まると、こうなりがちだ。『南史』顏延之傳には、顏が鮑照に謝靈運と自分とではどちらが勝れているか尋ね、鮑照が「謝五言如初發芙蓉、自然可愛。君詩若鋪錦列繡、亦雕績滿眼。（謝の五言は初めて芙蓉の發く

が如く、自然にして愛すべし。君の詩は錦を鋪き繡を列ぬ、亦た雕績眼に滿つ」と答えたと記す。鍾嶸『詩品』序では當時の詩壇が「隨其嗜欲、商榷不同、淄澠竝泛、朱紫相奪、喧議競起、准的無依。（其の嗜欲に隨い、商榷同じからず、淄澠竝びに泛る、朱紫相い奪い、喧議競い起こり、准的は依る無し）」であつた現象に觸れて、詩歌創作の風潮が當時隆盛を迎えていたことと結びつけている。評者は必ず當時にあつて傑出した人物で、かつ評語が當を得ておらねばならず、そうであつてはじめて人は信服する。『唐詩紀事』卷三の上官昭容の條には、沈佺期和宋之問の詩に對する上官昭容の評を記して云う、

二詩工力悉敵、沈詩落句云、「微臣雕朽質、羞睹豫章材。」蓋詞氣已竭。宋詩云、「不愁明月盡、自有夜珠來。」猶陟健舉。沈乃伏、不敢復爭。

二詩は工力悉く敵するも、沈詩の落句に云う、「微臣朽質を雕り、羞じて豫章の材を睹る」と。蓋し詞氣已に竭く。宋詩に云う、「明月の盡くるを愁えず、自づから夜珠の來たる有り」と。猶お健舉に陟む。沈は乃

評點 邁源（張）

ち伏し、敢えて復た爭わず。

作詩に褒賞が與えられることに關しては、應制の作に起源を求めねばならない。『新唐書』文藝傳中「宋之問傳」に云う、

武后遊洛南龍門、詔從臣賦詩。左史東方虬詩先成、后賜錦袍。之間俄頃獻、后覽之嗟賞、更奪袍以賜。

武后は洛南の龍門に遊び、從臣に詔して詩を賦せしむ。左史東方虬の詩先に成り、后は錦袍を賜う。之間 俄頃にして獻じ、后 之を覽て嗟賞し、更に袍を奪いて以て賜う。

詩社に褒賞が伴うのは、ここから來たものであろう。『月泉吟社詩』第一位の羅公福が「送詩賞小筭」を得て書いた文には、「詩成奪錦」の句がある。北宋の詩社のメンバーには官僚が多く、文學の修養もそれなりに高く、互いに詩作を批評し合うのが常であつた。歐陽修「聖俞會飲」詩には「更吟君句勝啖炙、杏花妍媚春酣酣」詩有「春風酣酣杏正妍」之句。吾交豪俊天下選、誰得衆美如君兼。詩工鐫刻露天骨、將論縱橫輕至鈴。（更に君の句を吟ずれば炙を啖うに勝

る、杏花妍媚にして春酣酣たり。(原注 君の詩に「春風酣酣杏正妍」の句有り。) 吾れ豪俊天下の選に交わるも、誰か衆美の君の如く兼なるを得んや。詩工鑣刻 天骨を露す、將に縱横を論じて輕きこと鈴に至らん) (『居士集』卷二)、「招許主客」詩には「更約多爲詩準備、共防梅老敵難當(更に多く爲るを約すも詩準備わり、共に梅老を防ぐも敵するに當たり難し)」(同上、卷十二)とある。汪藻の幼年の作に「一春略無十日晴」詩があり、「此篇一出、便爲詩社諸公所稱。(此篇一たび出づれば、便ち詩社諸公の稱する所と爲る)」(張世南『遊宦紀聞』卷三)という。

民間の詩社が發展し始めたのは、北宋の末年である。吳可『藏海詩話』に云う、

幼年間北方有詩社、一切人皆預焉。屠兒爲「蜘蛛」詩、流傳海內。

元祐間、榮天和先生客金陵、僦居清化市、爲學館。質庫王四十郎、酒肆王念四郎、貨角梳陳二叔皆在席下、餘人不復能記。諸公多爲平仄之學、似乎北方詩社。

……諸公篇章富有、皆曾編集。……今僅能記其一二、

以遺寧川好事者。欲爲詩社、可以效此、不亦善乎。幼年北方に詩社有り、一切の人 皆な焉こゝに預ると聞く。屠兒「蜘蛛」詩を爲り、海内に流傳す。

元祐の間に、榮天和先生金陵に客し、清化の市に僦居し、學館を爲る。質庫の王四十郎、酒肆の王念四郎、貨角梳の陳二叔皆な席下に在り、餘人復た記す能わず。諸公 多く平仄の學を爲し、北方の詩社に似たり。

……諸公の篇章富有にして、皆な曾て編集す。……今僅かに能く其の一二の、以て寧川の好事を遺す者を記すのみ。詩社を爲さんと欲すれば、以て此に效うべし、亦た善からずや。

民間の詩社では、その成員の多くが無名の士で、詩學の修養もそれほど深くないことがここからもわかるが、それゆえ、常に一人ないし二人の指導者が品題を與える必要があった。⁵⁷⁾これらの詩集が編集出版されるときは、やはり評語を併録するのが常であった。残念ながらこれらの書物の多くは亡佚しているのだが、さいわい『月泉吟社詩』が残卷ながら今に傳わっており、當時の様式を垣間見せてくれ

る。詩社の活動には必ず評點が伴っており、詩作を學ぶ時にも、評點が重視された。詩社は詩文の評點が成立するための社會的基盤となつた。つまり評點の成立には詩社が大きく影響したのである。

評點は中國古典文學批評の一つの方法だが、その成立がやや遅かつたために、それ以前の文學批評の著述から受けた影響も比較的多い。本節において、それらを一つ一つ分けて論じたのは、あくまで論述の便宜によるもので、實際の情況に即して言うなら、その影響はむしろ總合的に生じることが多かつたのである。

三 科舉と評點

科舉制度が成立すると、文學にたいへん大きな影響を及ぼすこととなつた。これは唐代ですでに目を引くものとなつてゐる。^②文學創作のみならず、文學批評への影響も明白だ。最も顯著なのは、詩格・文格・賦格などの類の書物である。唐代の詩格の書物は、科舉受験のためのものもあれば、初學に教えるためのものもあつたが、賦格の書物はと

いうと、そのほとんどが科舉と關連するものであつた。

『因話錄』卷三には、「李相國程・王僕射起・白少傅居易兄弟・張舍人仲素、爲場中詞賦之最。言程式者、宗此五人。

（李相國程・王僕射起・白少傅居易兄弟・張舍人仲素は、場中の詞賦の最爲り。程式を言う者、此の五人を宗とす）」と云い、

『冊府元龜』卷六四二には、後唐の長興元年（九三〇年）

に學士院が奏上を行なつたときも、「依『詩格』『賦樞』考試進士。（『詩格』『賦樞』に依りて進士を考試す）」と述べたと

記す。正史の藝文志・經籍志の著錄に據れば、上記の五人のうち、李程以外は、みな詩格の類の著作があること、王

起は『大中新行詩格』、白居易は『金針詩格』、白行簡は

『賦要』、張仲素は『賦樞』といったぐあいである。こう

した書物は一世を風靡したが、多くはすでに亡佚している。

現存する詩格は、すべて『全唐五代詩格校考』に收録されているが、附錄三に收める唐人の『賦譜』は、やはり律賦

の制作に關連するものだ。嚴羽『滄浪詩話』詩評は「唐詩は何を以て我が朝に勝る」という問いに答えて、「唐以詩取士、故多專門之學、我朝之詩所以不及也。（唐は詩を以て

士を取る、故に専門の學多し、我が朝の詩の及ばざる所以なり」と云う。宋詩が本當に唐詩に及ばないかどうかはさておき、宋代において科舉試験科目が變更されたことは、たしかに唐代とはちがった影響を文學にもたらした。評點の形成はその一つである。

元の倪士毅『作義要訣』自序に云う、

按宋初因唐制、取士試詩賦。至神宗朝王安石爲相、熙寧四年辛亥議更科舉法、罷詩賦、以經義論策試士、各占治『詩』『書』『易』『周禮』『禮記』一經、此經義之始也。宋之盛時、如張公才叔「自靖義」^⑩、正今日作經義者所當以爲標準。至宋季則其篇甚長、有定格律。首有破題、破題之下有接題、有小講、有繳結、以上謂之冒子。然後入官題、官題之下有原題、有大講、有餘意、有原經、有結尾。篇篇按此次序、其文多拘於捉對、大抵冗長繁複可厭。

按ずるに宋初は唐制に因りて、士を取るに詩賦を試す。神宗の朝に至り王安石 相と爲り、熙寧四年辛亥 議して科舉の法を更め、詩賦を罷め、經義論策を以て士

を試し、各おの『詩』『書』『易』『周禮』『禮記』の一經を占治せしむ、此れ經義の始めなり。宋の盛んなりし時、張公才叔「自靖義」の如きは、正に今日經義を作る者の當に以て標準と爲すべき所なり。宋の季に至れば則ち其の篇甚だ長く、定格律有り。首には破題有り、破題の下に接題有り、小講有り、繳結有り、以上之を冒子と謂う。然る後に官題に入り、官題の下に原題有り、大講有り、餘意有り、原經有り、結尾有り。篇篇此に按じて次序し、其の文多く對を捉うるに拘り、大抵冗長繁複して厭うべし。

宋代の科舉にはさまざまな科があつたが、重視されたのはやはり進士科であつた。^⑪進士科の試験は、王安石が經義の試験を立てて賦試を廢止してから、元祐年間に至つてさらに變化し、宋代を通じて、受験科目の創設や廢止また分制統合などが繰り返された。^⑫しかし、總體的に言えば、進士科の試験においては、詩賦の地位が下降し、經義や策論の地位が上昇するのが全體の趨勢であつた。嚴羽が唐詩の成果を説明するのに「唐は詩を以て士を取る」からだとし

たのは、こうした現實の狀況が反映しているのである。

王安石が明經科を廢止して詩賦の試験を取りやめたのは、かかげた目的としては、經學に通じた人材を選抜できるように、そして詩文の彫琢や空暗記で及第することがないようにということだった。しかし儒家の經義は、漢代以來、各人各様、統治者は自分の考えに經義をこじつけるのが常で、そうやって學生の思想を統制した。王安石の『三經新義』もつまりはそういうものであつた。彼は自分の「新義」を試験の準則として學宮に頒布し、受験生に學ばせた。これによって、經義の試験は個人の考えを自由に表現するものなどではなく、あらかじめ定められた經義についていかにうまく作文するかという問題にすぎないものとなつた。經義は文章によって具體化されるのだから、學生は受験にさいして文章の組み立てにやはり注意を拂わねばならない。南宋に到ると『三經新義』は廢止されたが、試験の方法は定まつており、やはり作文の書式に意を用いたのである。最も早い評點書が、詩には言及せず文に言及し、さらに文の構成や書式にこだわるのも、ここに根本の原因が

ある。

『文獻通考』卷三二「選舉考五」は宋代の科擧が「變聲律爲議論、變墨義爲大義。（聲律變じて議論と爲り、墨義變じて大義と爲る）」であつたと述べる。詩賦や記誦とは異なり、「議論」と「大義」は文章と、それも古文と緊密に結びついている。評點が宋代に出現したことは、科擧の試験科目の轉換という背景と不可分なのだ。宋人の魏天應が編纂した『論學繩尺』十卷について、『四庫全書總目』卷一八七「論學繩尺」提要は云う、

是編輯當時場屋應試之論、冠以「論訣」一卷。……考宋禮部貢擧條式、元祐法以三場試士、第二場用論一首。紹興九年定以四場試士、第三場用論一首、限五百字以上成、經義・詩賦二科竝同。又載紹興九年國子司業高閔筭子、稱太學舊法每旬有課、月一周之、每月有試、季一周之、皆以經義爲主、而兼習論策云云。是當時每試必有一論、較諸他文、應用之處爲多、故有專輯一編、以備揣摩之具者。天應此集、其偶傳者也。

是れ當時の場屋應試の論を編輯し、冠して以て「論

訣』一卷とす。……宋の禮部貢舉條式を考うるに、元祐の法は三場を以て士を試し、第二場は論一首を用う。紹興九年 定むるに四場を以て士を試し、第三場は論一首を用い、五百字以上を限りて成り、經義・詩賦の二科並びに同じ。又た紹興九年の國子司業高閔の笥子を載せ、稱すらく太學の舊法は毎旬に課有り、月に之を一周す、毎月試有り、季に之を一周す、皆な經義を以て主と爲して、論策を兼習す云云と。是れ當時 試毎に必ず一論有りて、諸を他文と較し、應用の處多しと爲す、故に專輯一編の、以て揣摩の具を備うる者有り。天應の此の集、其れ偶たま傳わる者なり。

つまりこの書物と當時の風潮との關連を指摘するのである。この書は南宋に編まれたものではあるが、當時この類の書物は非常に多かったにちがひなく、我々はこの「偶たま傳わ」った書物から、當時の一般的な狀況を推測することができる。宋代、進士科省試の選拔段階はしばしば變更されたが、おおむね熙寧から紹聖元年七月までは、多くは四場で、それ以後は三場であつた^④。三場にせよ四場にせよ、最

後にはすべて策論が課される。『論學繩尺』に收められるのがすべて「論」體であるのは、そこに原因があるう。卷頭の「論訣」では吳琮のことを引いていう。

省闈多在後兩場取人。諺云、三平不如一冠。若三場皆平平、未必得。若論策中得一冠場、萬無失一。……蓋有第一場文字不相上下、則於此辨優劣也。

省闈は多く後兩場に在りて人を取る。諺に云う、三平一冠に如かず。若し三場皆な平平なれば、未だ必ずしも得ず。若し論策中に一冠場を得れば、萬に一を失う無し。……蓋し第一場の文字 相い上下せざる有れば、則ち此に優劣を辨ずるなり。

この書が收録する文は十卷に分かれ、百五十六首、二首ごとに「一格」を立て、全部で七十八格、例えば「立說貫題格」「貫二爲一格」などである。各篇の文章の題下に、先ず出處を記し、次いで立說となるが、この二つは解題に似る。續いて批語があり、文章の妙處を指摘する。本文には箋解がつけられることが多く、『四庫提要』はそれを「略以典故分注本文之下（略は典故を以て本文の下に分ち注す）」

というが、實際には批評もあつた。例えば卷一の彭方廻「帝王要經大略」では、正文と箋解とは、字の大ききで區別される。

論曰。聖人之自治有常道。常是經、謂帝王自治有經常之道。故所持者約而其用博焉。約是要、博是大、用是略。夫中國之所以異於外裔者。氣象好。以經常不易之道存焉耳。此是要經。而聖人所以自治其中國者。應破題、「自治」字是主意。初豈以遠人之變而易吾之常也哉。應常字、是經。如其舍我之常徇彼之變。反接上面常變二字。

……

論に曰く。聖人の自ら治むるに常道有り。常は是れ經にして、帝王の自ら治むるに經常の道有るを謂う。故に持する所の者は約にして其の用は博きなり。約は是れ要、博は是れ大、用は是れ略。夫の中國の外裔に異なる所以の者は。氣象好し。經常不易の道を以て焉に存するのみ。此れ是れ要經。而るに聖人の自ら其の中國を治むる所以の者は。破題に應ず、「自治」字は是れ主意なり。初めより豈に遠人の變を以て吾の常を易えんや。常の

評點 邁源（張）

字に應ず、是れ經。如し其の我の常を捨て彼の變に徇えば。上面の常變二字に反接す。……

あきらかに、本文の下に記されたことばには批評的内容が含まれ、文脈や表現、さらにやや抽象的な「氣象」など今まで議論が及ぶ。全文の末尾には、別に評語を記すが、それは同じ「格」に屬する二種類の文章、または異なる「格」に屬する文章を比較するものであることが多い。こうした評語は、學生が受験作文の方法を身につけるのに役立つ。

それぞれの文章の前にはすべて批語があり、その批語は三種類に分けられる。一つは「批云」で導かれるもので、編者或いは箋解を施した者による批語である。二つには「某某批云」、例えば「陳竹林批云」や「徐進齋批云」、「馮厚齋批云」等で、全部で十四箇所ある。さらに注意を引くのは第三類の「考官批云」というもので、全部で二十七箇所ある。その中には考官名が見えるものもあること、「考官歐陽起鳴批云」「考官楊棟批」のごとくである。考官が受験生の文章に批語を記すことの由來は古い。唐代の

帖經や墨義への考試は、多くは記誦の學で、考官の批語の「通」や「不」の一字のみが多かったのだが、宋代の試験では經義・策論が重視され、五百字、七百字の文章となることも多く、また當時の科舉制度も嚴密さを増し、答案は一般には三つの過程を経て、最後に可否が決定された。成績の上下を決定するためには、答案について詳細に評論する必要が生じる。『宋會要輯稿』選舉六「貢舉雜錄舉士十二」の「寧宗嘉定十年正月九日臣僚」に云う、

初考（官）以點檢爲名、蓋點檢程式、別白優劣、而上於覆考（官）。覆考（官）以參詳爲職、蓋參訂辭義、精詳工拙、以上於知舉。至於知舉則取舍方定。初め考（官）點檢を以て名と爲す、蓋し程式を點檢し、優劣を別白して、覆考（官）に上る。覆考（官）參詳を以て職と爲す、蓋し辭義を參訂し、工拙を精詳し、以て知舉に上る。知舉に至りて則ち取舍して方めて定む。

ここで述べられているのは南宋の状況であるが、北宋熙寧以後の状況もほぼ同様であろう。『論學繩尺』に挙げられ

る考官の批語に即していうと、その中に「知舉批」というのが卷九「聖人大明至公何如論」に見られるが、語氣はかなり斷定的である。「意味深長、議論明瑩、說得「大明至公」字、非苟作者。（意味は深長、議論は明瑩、「大明至公」の字を説き得て、苟めに作る者に非ず）。ここから推測するに、これ以外に「考官批云」というのは、覆考官「名前を伏せた試験官」による批語であろう。その語氣からみると、薦舉の意味を含むことが多いのは、例えば彭方邇「帝王要經大略」に批して「說有根據、造辭老蒼、較之他作、氣象大段不同。眞可爲省闈多士之冠。（說に根據あり、造辭は老蒼、之を他作に較ぶるに、氣象大段同じからず。眞に省闈の多士の冠と爲すべし）」（卷二）、繆烈「孝武號令文章如何」に批して「議論正大、文勢發越、可謂傑特之作。（議論は盛大、文勢は發越、傑特の作と謂うべし）」（卷二）、李發の同題に批して「立說尖新、造語警拔、眞百鳥中之孤鳳也。如繆烈論以表章六經爲主意、固是正說、但立說稍同、不如此篇奇偉、甚刮人眼。（立說是尖新、造語は警拔、眞に百鳥中の孤鳳なり。繆烈の論に表章六經を以て主意と爲すが如きは、固より是れ正說な

れども、但だ立説稍や同じくして、此の篇の奇偉にして、甚だ人眼を刮くに如かず」(卷二)、危科「文武之道同伏羲」に批して「意甚古、語甚新、下字亦甚異。此論中巨擘也。(意は甚だ古く、語は甚だ新し、字を下すこと亦た甚だ異なり。此の論中の巨擘なり)」(卷二)、葉大有「太宗英武仁恕如何」に批して「就本文立説、議論有據、文字明潔、眞佳作也。

(本文に就きて立説し、議論に據有り、文字は明潔、眞に佳作なり)」(卷四)、陳文龍「理本國華如何論」に批して「有學問、有識見、有議論、有文藻、反覆轉摺、不費斧鑿、健筆也。

「心之精神」四字、亦有本祖。(學問有り、識見有り、議論有り、文藻有り、反覆轉摺し、斧鑿を費やさず、健筆なり。「心之精神」四字、亦た本祖有り)」(卷九)。こうした評語は、まさに「辭義を參訂し、工拙を精詳す」と稱するにふさわしい。考官の批語が評點の評語へと展開してきた軌跡を、『論學繩尺』においてまざまざと目にする事ができる。^⑩

『論學繩尺』卷首「論訣」の「諸先輩論行文法」は、戴溪の語を引いて「據古文爲文法(古文に據りて文法と爲す)」という。そのため經義・策論の優劣を文章の面から判斷す

るのには、唐宋名家の古文がやはり基準とされた。例えば、徐霖「太宗治人之本」の「考官批云」に、

文有古體、語有古意、當於古文求之、其源委得之柳子厚「封建論」。

文に古體有り、語に古意有り、當に古文に之を求むれば、其の源委は之を柳子厚「封建論」に得べし。(卷

二)

吳君擢「唐虞三代純懿如何」には、

文字出入東萊議論、法度嚴密、意味深長、說得聖人本心出、深得論體、可敬可服。

文字は東萊の議論を出入し、法度は嚴密、意味は深長にして、說きて聖人の本心より出づるを得、深く論體を得、敬すべし服すべし。(卷二)

丘大發「三聖褒表功德」には、

立論高、行文熟、用事詳贍、筆力過人。其學識得之『左氏』、其文法得之東萊『博議』。

立論は高く、行文は熟し、用事は詳贍、筆力は人に過ぐ。其の學識は之を『左氏』に得、其の文法は之を東

萊『博議』に得たり。(卷二)

黄朴「經制述作如何」には、

文勢圓轉、意味深長、蓋自呂東萊『七聖論』中來。

文勢は圓轉、意味は深長、蓋し呂東萊『七聖論』中自り來たるなり。(卷五)

と云う。

批語の中に何度も呂祖謙が言及されるが、呂氏には『左氏博議』の作があり、自ら「爲諸生課試之作也(諸生課試の爲の作なり)」(『左氏博議』序)と稱し、書中でも「枝辭贅喻、則舉子所以資課試者也。(枝辭贅喻は、則ち舉子の課試に資する所以の者なり)」(同前)と云う。その書は一世を風靡し、それゆえ世の人の手本となりえた。宋代には當朝の文章を選んだ作文手引き書が多く編纂され、今に傳わるものはほとんどないものの、『文獻通考』選舉考五に、南宋紹興年間の太學博士王之望が「舉人程文、或純用本朝人文集數百言、或歌頌及佛書全句、舊式皆不考、建炎初悉從刪去、故犯者多。(舉人の程文は、或いは純ら本朝人の文集數百言、或いは歌頌及び佛書全句を用い、舊式は皆な考えず、建炎初めて

悉く刪去に従う、故に犯す者多し)」と語ったことを引くのを見ると、これらのお手本は試験のときの丸寫しの材料となっていたことがわかる。けれどもほんとうに經義や策論の文章をきちんと書こうとすると、やはり古文の構成法にまで遡らねばならなかった。呂氏は、韓・柳・歐・蘇らの古文六十餘篇を選び、それぞれに命意・布局の箇所を標示し、學生に作文の道筋を示し、題して『古文關鍵』とした。陳振孫『直齋書錄解題』卷五五は、この書が「標抹註釋、以教初學。(標抹註釋して、以て初學に教う)」ものであると云うが、これはこの書物がもともと評や點を備えていたことを示す。「以教初學」というのは、實際には科舉の作文のためであった。樓昉『崇古文訣』(もとの名は『迂齋古文標注』)が「逐章逐句、原其意脈、發其祕藏。(章を逐い句を逐い、其の意脈を原ね、其の祕藏を發く)」(劉克莊『迂齋標注古文』序、『後村大全集』卷九六)とされるのも、やはり受験作文上達の需要に應えるものであった。劉克莊は樓昉が「以古文倡莆東、經指授成進士名者甚衆。(古文を以て莆東〔福建省南部〕に倡し、指授を経て進士の名と成る者甚だ衆し)」(同

前)と述べることから、その書物と科擧との關係を理解できよう。が、この方面の典型的な著作としては、まず謝枋得『文章軌範』を挙げねばなるまい。

王守仁『文章軌範』序に、「宋謝枋得氏取古文之有資於場屋者、自漢迄宋凡六十有九篇、標揭其篇章句字之法、名之曰『文章軌範』。蓋古文之奧不止於是、是獨爲擧業者設耳。(宋)の謝枋得氏は古文の場屋に資有る者を取り、漢自り宋に迄る六十有九篇、その篇章字句の法を標し掲げ、之に名づけて『文章軌範』と曰う。蓋し古文の奥は是に止まらず、是れ獨り擧業の者の爲に設くるのみ」と云う。書物全體は、「侯・王・將・相・有・種・乎」の七字の標目によつて七卷〔七集〕に分けられる。語はもと『史記』陳涉世家に由來するが、實際、宋代においては門閥による權力の獨占は完全に打破され、科擧試験さえ突破すれば何の後ろ盾もない寒門の士が一躍「侯王將相」にもなるという望みが現實のものとなつていた。全體は「放膽文」〔卷一・二〕と「小心文」〔卷三以下〕の二つに文章を分け、各集〔卷〕冒頭の評論は、その書物と科擧との關わりを十分に示し得ている。

王字集に云う、

辯難攻撃之文、雖厲聲色、雖露鋒芒、然氣力雄健、光焰長遠、讀之令人意強而神爽。初學熟此、必雄於文。

千萬人場屋中、有司亦當刮目。

辯難攻撃の文、聲色を厲ますと雖も、鋒芒を露わにすと雖も、然るに氣力雄健、光焰長遠にして、之を讀めば人をして意強くして神爽ならしむ。初學 此に熟すれば、必ず文に雄たり。千萬人の場屋中にても、有司亦た當に刮目すべし。

將字集に云う、

議論精明而斷制、文勢圓活而婉曲、有抑揚、有頓挫、有擒縱。場屋程文論、當用此樣文法。

議論精明にして斷制、文勢圓活にして婉曲、抑揚有り、頓挫有り、擒縱有り。場屋程文の論、當に此の樣の文法を用うべし。

相字集に云う、

此集文章古得道理強、以清明正大之心、發英華果銳之氣、筆勢無敵、光焰燭天。學者熟之、作經義、作策、

必擅大名於天下。

此の集の文章は古にして道理の強きを得、清明正大の心を以て、英華果銳の氣を發く、筆勢敵する無く、光焰天を燭す。學ぶ者之に熟し、經義を作り、策を作れば、必ず大名を天下に擅^{はじま}まにす。

有字集に云う、

此集皆謹嚴簡潔之文、場屋中日晷有限、巧遲者不如拙速、論・策結尾略用此法度、主司亦必以異人待之。

此の集は皆な謹嚴簡潔の文にして、場屋中は日晷限り有り、巧遲なる者は拙速に如かず、論・策の結尾は略ぼ此の法度を用うれば、主司亦た必ず異人を以て之に待す。

こうして見ると、當時の評點書の多くが實際は科擧のために書かれたことは明らかだ。いま傳わっている早期の評點書は、ほとんどすべてそうである。

宋代の經義・策論の文章には、一定の書式があり、とくに南宋になると、「講求漸密、程式漸嚴、試官執定格以待人、人亦循其定格以求合、於是雙關、三扇之說興、而場屋

之作遂別有軌度。（講求漸く密にして、程式漸く嚴なり、試官

定格を執りて以て人に待し、人も亦た其の定格に循いて以て合するを求む、是に於て雙關・三扇の説興り、而うして場屋の作は遂に別に軌度有り）（四庫全書總目）卷一八七「論學繩尺」提要」という状態となつた。評點の著作も多くここに着目し、たとえば『古文關鍵』の冒頭に「總論看文字法」を掲げて、

「如何是起頭換頭佳處、如何是繳結有力處、如何是融化屈折、剪截有力處、如何是實體貼題目處。（如何なるが是れ起頭換頭に佳き處か、如何なるが是れ繳結に力有る處か、如何なるが是れ融化屈折して剪截に力有る處か、如何なるが是れ實體の題目に貼する處か）」と述べ、古文を評論するにあたつても、しばしば起承轉結の箇所に注記を加える。『文章規範』卷

三の蘇軾「王者不治夷狄論」評には、「此是東坡應制科程文六論之一、有冒頭、有原題、有講題、有結尾。當熟讀、當暗記、始知其巧。（此れは是れ東坡應制科程文六論の一にして、冒頭有り、原題有り、講題有り、結尾有り。當に熟讀し、當に暗記して、始めて其の巧なるを知るべし）」という。後世の制舉文（すなわち八股文）はここから發展したものである。

傳統中國においては文學批評と人物品評は密接な關係にあり、その影響から、評者たちも人體の各部位によつて文學を比喩するのが常であつた。けれども科學に關わる文學評論においては、これらの比喩は獨特なものとなり、つまり「頭・項・腹（腰）・尾」といった語を用いて、文章や詩歌の構造を表わすに到つたのである。唐代の『詩式』（撰者不詳）が「雜亂」病を擧げて、

凡詩發首誠難、落句不易。或有制者、應作詩頭、勒爲詩尾。應可施後、翻使居前、故曰雜亂。⁴⁶⁾

凡そ詩の發首は誠に難く、落句は易からず。或いは制有る者、應じて詩頭と作し、勒めて詩尾と爲す。應じて後に施すべく、翻えつて前に居らしむ、故に雜亂と曰う。

と云う中にも、この種の比喩の兆しは見える。また同じく唐代の『賦譜』（撰者不詳）にも、

凡賦體分段、各有所歸。……至今新體、分爲四段。初三四對約三十字爲頭、次三對約四十字爲項、次二百餘字爲腹、最末約四十字爲尾。就腹中更分爲五。初約四

十字爲胸、次約四十字爲上腹、次約四十字爲中腹、次約四十字爲下腹、次約四十字爲腰。⁴⁸⁾

凡そ賦體分段し、各の歸す所有り。……今の新體に至りて、分かちて四段と爲す。初めの三四對約三十字を頭と爲し、次の三對約四十字を項と爲し、次の二百餘字を腹と爲し、最末約四十字を尾と爲す。腹中に就きては更に分かちて五と爲す。初の約四十字を胸と爲し、次の約四十字を上腹と爲し、次の約四十字を中腹と爲し、次の約四十字を下腹と爲し、次の約四十字を腰と爲す。

と云い、魏慶之『詩人玉屑』卷一二に引く『金針詩格』も、第一聯謂之「破題」、欲如狂風卷浪、勢欲滔天。又如海鷗風急、鸞鳳傾巢、浪拍禹門、蛟龍失穴。第二聯謂之「領聯」、欲似驅龍之珠、善抱而不脫也。亦謂之「撼聯」者、言其雄贍適勁、能裊闔天地、動搖星辰也。第三聯謂之「警聯」、欲似疾雷破山、觀者駭愕、搜索幽隱、哭泣鬼神。第四聯謂之「落句」、欲如高山放石、一去不回。

第一聯は之を「破題」と謂い、狂風の巻浪し、勢い天を滔^{たふ}がんと欲するが如し。又た海鷗の風急にして、鸞鳳の巢を傾け、浪は禹門を拍ち、蛟龍は穴を失うが如くならんと欲す。第二聯は之を「領聯」と謂い、驪龍の珠に似て、善く抱きて脱さざらんと欲するなり。亦た之を「撼聯」と謂う者は、其の雄贍遒勁なること、能く天地を埤闔し、星辰を動搖するを言うなり。第三聯は之を「警聯」と謂い、疾雷の山を破り、觀者駭愕し、幽隱を搜索し、鬼神を哭泣せしむるに似んと欲す。第四聯は之を「落句」と謂い、高山より石を放ち、一たび去りて回らざるが如くならんと欲す。と云う。『金針詩格』は白居易の作だとされるが、この文章が、本當に白居易の手になるかどうかは、むしろはなはだ疑わしい。けれども唐代には『詩格』『賦樞』などを基準として進士を試験し、白居易もまた當時の受験生が「宗」とする五人の一人であつたからには、この文章はやはり當時の科擧と關わりがあろう。五代の神叢『詩格』には、「論破題」「論領聯」「論詩腹」「論詩尾」などの節が

あり、それも當時の風潮を反映したものでらう。宋代の評點書で科擧と關わるものは、おおむねこうした立論をする。先に引用した呂祖謙と謝枋得の論もその一例である。また『論學繩尺』卷首「論訣」は馮椅「論一篇之體」を引いて云う、

鼠頭欲精而銳、豕頂（似爲「項」之誤）欲肥而縮、牛腹欲肥而大、蜂尾欲尖而峭。

鼠頭は精にして銳ならんと欲し、豕頂（恐らく「項」の誤りであらう）は肥にして縮ならんと欲し、牛腹は肥にして大ならんと欲し、蜂尾は尖にして峭ならんと欲す。さらに、歐陽起鳴の「論頭」「論項」「論心」「論腹」「論腰」「論尾」を引き、「論頭」に云う、

論頭乃一篇綱領、破題又論頭綱領。兩三句間要括一篇意、承題要開闢、欲養下文、漸下莫說盡爲佳。欲抑先揚、欲揚先抑、最嫌直致無委曲。講題・舉題只有詳略兩體、前面意說盡、則舉題當略。前面說未盡、則舉題當詳。繳結收拾處要緊切、前後相照。論頭は乃ち一篇の綱領にして、破題は又た論頭の綱領

なり。兩三句の間に一篇の意を括るを要し、題を承けて開闔して、下文を養わんと欲するを要し、漸く下りて説き盡す莫きを佳と爲す。抑えんと欲すれば先ず揚げ、揚げんと欲すれば先ず抑え、最も直致にして委曲無きを嫌う。講題・舉題は只だ詳略の兩體有るのみにて、前面に意を説き盡せば、則ち舉題は當に略すべし。前面に説の未だ盡くさざれば、則ち舉題は當に詳しかるべし。繳結收拾の處は緊切にして、前後相い照らすを要す。

ここの言及される題目の「破」「承」「轉」「結」は、南宋以來の程文「科舉作文」の定式であり、明清の八股文の「破題」「承題」「起講」「大結」なども、つまりここから發展してきたものだ。^④元代以來、一般の文學理論の中にもこのような立論は多く見られるようになり、例えば楊載の撰とされる『詩法家數』は、「律詩要法」節で「起承轉合」を冒頭に置き、「破題」「領聯」「頸聯」「結句」ごとに説明を加えた。傅與礪の撰とされる『詩法正論』にも類似的論が見られる。明の王昌會『詩話類編』卷二「論起承轉合」

には、「以律詩論之、首句是起、二句是承、中二聯則襯貼題目、如經義之大講、七句則轉、八句則合耳。（律詩を以て之を論ずれば、首句は是れ起、二句は是れ承、中二聯は則ち題目に襯貼すること、經義の大講の如し、七句は則ち轉、八句は則ち合なるのみ）」という。起承轉合は律詩の普遍的な構成法となつたが、「三家村」^{かたじけなく}の先生が唱える初學向けの標語ともなつたのだ。^⑤王鶚は「作文三體」を唱えて「入手當如虎首、中如豕腹、終如蠶尾。（入手は當に虎首の如く、中は豕腹の如く、終は蠶尾の如し）」（王惲『玉堂嘉話』卷一引）と云い、喬吉は「作今樂府法」を唱えて「鳳頭、豬肚、豹尾」（陶宗儀『南村輟耕錄』卷八引）と云うのも、上述の立論と關わるものであろう。

すでに述べたように、最初期の評點書が詩に言及せず文を評したことは、科舉と深く關わるものであった。一方で宋末の劉辰翁が精力的に詩歌評點を行なつたのも、やはり科舉と關わりがあろう。元初の歐陽玄『羅舜美詩』序は云う、

宋末須溪劉會孟出於廬陵（即歐陽修）、適科目廢、士子

專意學詩、會孟點校諸家甚精、而自作多奇崛、衆翕然宗之、於是詩又一變矣。

宋末須溪の劉會孟は廬陵（即ち歐陽修）より出づ、適たま科目廢され、士子意を専らにして詩を學ぶ、會孟諸家を點校すること甚だ精しくして、自作も奇崛多く、衆翕然として之を宗とし、是に於て詩又た一變す。

〔圭齋文集〕卷八

宋代の科舉で記録されているものは、度宗十年（一二七四年）が最後で、その五年後に宋朝は滅び、のち元の延祐年間になつてようやく科舉は復活した。この四十年餘りの間に、詩歌の風潮が満ちてきたのである。陸文圭「跋陳元復詩稿」は「科場廢三十年、程文閣不用、後生秀才氣無所發泄、溢而爲詩（科場廢さること三十年、程文閣²不用て用いず、後生の秀才氣の發泄する所無く、溢ちて詩を爲る）」（「牆東類稿」卷九）と云う。劉辰翁の評點は、おもに作詩の手引きのためのものであった。その子の劉將孫「刻長吉詩序」に云う、

先君子須溪先生於評諸家詩、最先長吉。蓋乙亥辟地山

中、無以紓思寄懷、始有意留眼目、開後來。自長吉而後及於諸家。……開示其微、使覽者隅反神悟、不能細論也。……每見舉長吉詩教學者、謂其思深情濃、……最可以發越動悟者在長吉詩。

先君子須溪先生 諸家の詩を評するに於て、長吉を最も先にす。蓋し乙亥に地を山中に辟け、以て思を紓し懷を寄する無く、始め意は眼目に留め、後來を開くに有り。長吉自りして後ち諸家に及ぶ。……其の微なるを開示し、覽る者をして隅反神悟せしむるも、細論すること能わざるなり。……毎に長吉詩を舉げて學ぶ者に教うるに、其の思深く情濃きを謂うを見る、……最も以て發越動悟すべき者は長吉の詩に在り。

（養吉齋集）卷九

當時の狀況から考えて、これら詩を學ぶ者の多くは、恐らく東南地域の詩社のメンバーであつたと思われる。それゆえ、その詩歌の評點はやはり科舉と間接的に關わつていた。宋末元初の詩社の中には、科舉の手法をまねて、詩作の優劣を評し、席次を並べるものがあつた。それを一書に編

めば、評點となる。宋末元初の月泉吟社などは、ほぼ完全に科擧のやり方を模倣している。まず題目を定め、期日までに答案を提出、その後で副本を寫して作者名を隠し、科擧試験官によつて順位を定め、期日になるとそれを公表し、賞品を出す。例えば、第一位の羅公福というのは、實名は連文鳳だが、名をふせるやり方は、科擧をまねたものなのである。評語に「衆傑作中求其粹然無疵、極整齊而不窘邊幅者、此爲冠。」（衆くの傑作中に其の粹然無疵にして、極めて整齊にして邊幅に窘せざる者を求むれば、此れを冠と爲す）」（『月泉吟社詩』）と云うなどは、科擧試験官の評語にそっくりだ。評された人々も、しばしば自ら學生然として振る舞う。羅公福「回送詩賞筭」は「撫景興思、慨唐科之不復以詩爲試、覲同雅之可追、竊知扶植之盛心、正欲主維乎公是。」（景を撫し思を興し、唐科の復た詩を以て試と爲さざるを慨く。同雅の追うべくを覲、扶植の盛心を竊い知る、正に公是に主維せんと欲す）」と述べ、第二位の司馬澄翁は「置諸榜眼、壯此詩脾。……錄其善者、願爲吟社之門生。羅而致之、景仰騷壇之座主。」（諸を榜眼に置き、此の詩脾を壯んにす。……

評點 週源（張）

其の善なる者を録し、吟社の門生たらんことを願う。羅ねて之に致り、騷壇の座主を景仰す）」（同前）と述べる。また越中詩社が「枕易」を題とした答詩三十餘篇を集めたおりには、招かれた評點者は「考官李侍郎」などと呼ばれた。黃庚『月屋漫稿』、張觀光『屏岩小稿』はともに「枕易」詩を收録し、「越中詩社試題都魁」として、ともに批語を付す。元明交替の際にも、こうしたやり方は依然廣く行われた。李東陽『麓堂詩話』に云う、

元季國初、東南人士重詩社、每一有力者爲主、聘詩人爲考官、隔歲封題於諸郡之能詩者、期以明春集卷。私試開榜次名、仍刻其優者、略如科擧之法。

元季國初、東南の人士詩社を重んじ、毎に一有力者を主と爲し、詩人を聘まねきて考官と爲す、歳を隔て題を諸郡の詩を能くする者に封じ、期するに明春を以て卷を集す。私に試して開榜次名し、仍お其の優なる者を刻す、略は科擧の法の如し。

これら科擧を模倣した行事はおもに詩社の活動であつたが、この活動に伴う評點自体も、やはり科擧と不可分であつた。

すでに述べたように、南宋以降、經義・策論の文はしだいに書式が定まり、そこで起承轉結の論が詩學理論にも影響を及ぼし、一般的な通論となった。後世の評點においてもこの立論はしばしば用いられた。金聖歎・馮舒・徐增之らによる唐詩や杜詩への批は、いずれもこの方法を用いる。

金聖歎『唱經堂杜詩解』卷一「贈李白」の題下の批に云う、唐人詩多以四句爲一解、故雖律詩、亦必作二解。若長篇、則或至作數十解。夫人未有解數不識、而尙能爲詩者也。如此篇第一解、曲盡東都醜態。第二解、姑作解釋。第三解、決勸其行。分作三解、文字便有起、有轉、有承、有結。從此雖多至萬言、無不如線貫華、一串固佳、逐朵又妙。自非然者、便更無處用其手法也。

唐人の詩は多く四句を以て一解と爲す、故に律詩と雖も、亦た必ず二解を作す。若し長篇なれば、則ち或いは數十解を作すに至る。夫れ人の未だ解數を識らずして、尙お能く詩を爲る者有らざるなり。此篇の如きは、第一解、東都の醜態を曲盡す。第二解、姑く解釋を作す。第三解、決して其の行を勸む。分けて三解と作し、

文字に便ち起有り、轉有り、承有り、結有り。此れ從り多きは萬言に至ると雖も、線の華を貫き、一串固より佳にして、朵を逐いて又た妙なるに如かざる無し。然る者に非ざる自りは、便ち更に其の手法を用うる處無きなり。

このように起承轉結ないし構成分解の方法で詩を論じるのは、一定の道理はあるが、牽強付會に陥りがちなのも事實だ。地を劃して牢と爲すごとく、自繩自縛になるのがおちである。王夫之はこうした論詩法を嚴しく批判して云う、起承轉收、一法也。試取初盛唐律驗之、誰必株守此法者。……且道「盧家少婦」一詩作何解。是何章法。又如「火樹銀花合」渾然一氣、「亦知戍不返」曲折無端。……起不必起、收不必收、乃使生氣靈通、成章而達。……杜（甫）更藏鋒不露、搏合無垠、何起何收、何承何轉。陋人之法、烏足展騏驥之足哉。

起承轉收、一法なり。試みに初盛唐律を取りて之を驗すれば、誰か必らず此の法を株守する者ならん。……且つ道う「盧家少婦」一詩は何の解と作す。是れ何の

章法ならん。又た「火樹銀花合」の渾然一氣にして、「亦知戍不返」の曲折無端なるが如きは、……起にして必らずしも起ならず、收にして必らずしも收ならずして、乃ち生氣をして靈通し、成章して達せしむ。……杜（甫）更に鋒を藏して露わさず、搏合して垠無し、何の起にして何の收なる。何の承にして何の轉なる。陋人の法、烏足を騏驥の足に展ずるものなるかな。

〔薑齋詩話〕卷下

清代中葉以後、このように詩を論じるやり方はしだいに消失していったが、こうした立論の形成を考察するには、科擧と關わる詩文批評にまで遡らざるを得ず、その進展の過程において、科擧文の形式が一般の詩文批評の術語や方式にも力を及ぼしたのである。評點も例外ではあり得なかった。

四 評唱と評點

禪宗は唐代に盛んになってのち、文學や藝術に對して多大な影響を與えた。文學批評に即しても、思考様式、心理

様態、術語や著述形式などのすべてにその影響の痕跡が見られる。しかし批評方法の違いによって、例えば詩話や詩格、また論詩詩といった形式によって、禪宗の影響をどの程度またどの方面で受けたかはさまざまである。評點という觀點からすると、輕視すべからざるは評唱からの啓發であろう。

評唱は、禪宗特有の著述形式の一つで、その出現は禪宗の宗旨と結びついている。禪宗は、自身で悟りを開き、ことばに捉われないことを強調するが、學徒を導く爲には、ことばや文章という手段に訴えないわけにはいかない。便法として、古えの大宗師の言行を引用したり、またはそれらの人々が道を會得した因縁を擧げて、學徒を悟りへと導いたのである。こうした言行もしくは因縁は禪家では「公案」と呼ばれた。三教老人は『碧巖錄』に序を施して云う、嘗謂祖教之書、謂之公案者、倡於唐而盛於宋、其來尙矣。二字乃世間法中吏牘語、……具方冊作案底、陳機境爲格令、與世間所謂金科玉條、清明對越諸書、初何以異。祖師所以立爲公案、留示叢林者、意或取此。⁵⁴

嘗て祖敎の書を謂いて、之を公案と謂うは、唐に倡はまり宋に盛んなり。其の來たるや尙し。二字は乃ち世間法中の吏牘の語なり、……方冊を具えて案底と作し、機境に陳べ格令と爲すは、世間の所謂、金科玉條、清明對越の諸書と、初めより何を以てか異ならん。祖師の立てて公案と爲し、叢林に留示する所以は、意或いは此こゝに取る。

禪師が說法するのに、常に古人の公案を擧げるようになったのは、唐代に始まり、宋代になると、さらに普遍的となつた。『五燈會元』卷一一「丞熙應悅禪師」の堂上のことばに云う、

我宗無言句、徒勞尋露布。現成公案已多端、那堪更涉他門戶。

我が宗に言句無く、徒らに勞して露布を尋ぬ。現成の公案已に端多ければ、那んぞ更に他の門戸を渉るに堪えん。

しかし、公案は必ずしも誰もが悟ることのできるものではなく、それゆえ禪家には「公案未了」また「未了の公案」

という言い方がある。⁵⁵⁾『五燈會元』卷一四「天寧禪師」には「丹霞有箇公案、從來推倒扶起。今朝普示諸人、且道是箇甚底。顧視左右曰、「會麼。」曰「不會。」（丹霞に箇の公案有り、從來より推倒扶起す。今朝諸人に普く示し、且く道え、是箇甚底ぞ。左右を顧視して曰く、「會たるか。」曰く「會ず。」）と云う。また同書卷二〇の「梁山師遠禪師」の堂上のことばに、楊岐の三本足の驢馬の話を持ち出して云う、這公案直須還他透頂徹底漢、方能了得。此非止禪和子會不得、而今天下叢林中、出世爲人底、亦少有會得者。這の公案は直だ須く他の透頂徹底的漢に還して、方めて能く了得すべし。此れ止だ禪和子の會し得ざるのみに非ずして、而今天下の叢林中、出世して人と爲る底、亦た會し得る者有ること少なし。

また、同じ公案に對して學徒たちがあれこれ考えて得たことも必ずしも一致しておらず、偏りや誤解すらあつた。同書卷二〇「焦山師體禪師」は堂上にて「臨濟四喝」公案を擧げて云う、

這箇公案、天下老宿拈掇甚多、第恐皆未盡善。

這箇の公案は、天下の老宿も拈掇すること甚だ多きも、第だ恐らくは皆な未だ善を盡くさず。

これら二つの原因によつて、禪家はさらに「頌古」と「代別」を生みだし、公案に「轉語」を加え「見地」を著し、考えを新たにさせて、學徒を啓發しようとした。最初にこれに名を與えたのは汾陽の善昭禪師である。『汾陽無德禪師語錄』巻中にもつばら「頌古代別」を集めるが、頌古は韻文形式で公案の側面から切りこんでいくもので、代別は直敘形式で公案に補正を加えるものである。善昭禪師は「室中請益古人公案、未盡善者、請以代之。語不格者、請以別之、故目之爲「代別」。(室中に古人の公案を益するを請う、未だ善を盡くさざる者は、以て之に代うを請う。語の格らざる者は、以て之に別るを請う。故に之を目して「代別」と爲す)」と云う。汾陽の禪師のこうしたやり方を全面的に繼承したのが、雪竇重顯禪師である。『祖庭事苑』卷一から卷四には、雪竇の著作として八種が挙げられていて、その中に「雪竇拈古」と「雪竇頌古」が見える。ここでの「拈古」は實際には「代別」にほかならない。圓悟克勤『碧巖錄』

第一則の評唱で、「大凡頌古只是繞路說禪、拈古大綱據款結案而已(大凡そ頌古は只だ是れ繞路して禪を説き、拈古は大綱據款に據りて案を結すのみ。)」と云う。頌古は詩歌形式を用い、意は言外にあるので、ゆえに「繞路說禪」となる。拈古は直敘形式で公案を分析するので、法律の條文に基づいて犯案を決するのと同様ということだ。けれどもまさに「繞路說禪」であるがために、學徒は依然として會得し難く、そこでそれに對してさらに評說提唱を作る必要が生じ、それが「評唱」の誕生となつたのである。

現存する最古かつ最大の影響をもつ評唱は、北宋宣和七年(一一二五)に成立した『碧巖錄』(また『碧巖集』とも)である。『碧巖錄』はもともと北宋初期の雪竇重顯(九八〇—一〇五二)が『景德傳燈錄』『雲門廣錄』および『趙州錄』などの書物から選び出した百則の公案に百則の頌古を作り、公案の含義を明らかにしようとしたものである。北宋後期に到り、圓悟克勤(一〇六三—一一三五)はその基礎の上に「垂示」「著語」「評唱」を追加し、これら百則の公案と頌古に對してさらに説明を加え、この書を完成させた。

雪竇は詩才に富んでいたので、その頌古は當時おおいに行した。圓悟『碧巖錄』第四則の評唱に、「雪竇頌一百則公案、一則則焚香拈出、所以大行於世。他更會文章、透得公案、盤礴得熟、方可下筆。（雪竇は一百則の公案を頌するに、一則則に香を焚いて拈出す、所以に大いに世に行わる。他、更に文章を會し、公案を透得す。盤礴して熟するを得て、方めて筆を下すべし）」と云う。圓悟禪師は、識見も高く、才能もあり、二十年間、幾度も弟子に『雪竇頌古』を解説して、最後に書物としてまとめたのである。關友無黨の「後序」に云う、

『雪竇頌古』百則、叢林學道之詮要也。其間取譬經論或儒家文史、以發明此事、非具眼宗匠時爲後學擊揚剖析、則無以知之。圓悟老師在成都時、予與諸人請益其說、師後住夾山道林、復爲學徒扣之、凡三提宗綱。語雖不同、其旨一也。

『雪竇頌古』百則は、叢林にて道を學ぶの詮要なり。其の間に譬を取りて經論或いは儒家文史、以て此事を發明するも、具眼の宗匠の時に後學の爲に擊揚剖析するに非ざれば、則ち以て之を知る無し。圓悟老師 成

都に在りし時、予 諸人と其の説を益さんことを請う、師は後に夾山道林に住み、復た學徒の爲に之を扣くに、凡そ三たび宗綱を提す。語は同じからずと雖も、其の旨は一なり。

禪宗が發展して北宋後期に到ると、各宗派の間に對立もあれば、融和も生じるようになった。おおまかには、臨濟宗は曹洞宗との對立が目につき、一方で雲門宗とは融和へと向かいつつあった。雪竇は雲門宗系統に屬し、雲門文偃・香林澄遠・智門光祚の宗脈に連なる。圓悟は臨濟宗楊岐派の系統に屬し、その法系は楊岐方會・白雲守端・五祖法演から圓悟克勤へと到るものである。彼が雲門宗の典籍に評唱を加えたこと、この事實も兩宗派が合流の傾向にあったことを示している。唐の咸通年間、夾山善會禪師が「如何是夾山境」の問いに答えたとき、「猿抱子歸青嶂裏、鳥銜花落碧岩前。（猿は子を抱きて青嶂の裏に歸り、鳥は花を銜えて碧岩の前に落つ）」という詩の二句を用いた（『景德傳燈錄』卷十五「夾山善會禪師」）。圓悟は夾山靈泉禪院の住持であった時に、最後にこの書物を評唱したので、それに因んで

『碧巖錄』としたのである。

『碧巖錄』の構造は獨特のもので、以下の五つの部分から構成されている。一つは垂示（あるテキストでは「示衆」）で、本則公案の重點を取り上げて説明を加えたものである。二つめは本則、つまり雪竇が選び出した公案である。三つめは頌古で、雪竇が偈頌の形式で公案を解説したもの。四は著語で、圓悟が本則と頌古の字間ならびに行間に施された細かな短評である。五は評唱で、本則と頌古の後に別々に付されていて、本則あるいは頌古の總評ともなっている。そのため、廣義の「評唱」には「垂示」「著語」もその内に含めねばならない。ただこれら四部分の順序（「著語」は本則と頌古の中に散見しており、獨立した篇を爲しているのではない）は、版本によって違いがある。『碧巖錄』の版本として最も流布したのは元の大徳四年（一二三〇）張焯（明遠）刊本（張本と簡稱）で、日本の『大正新修大藏經』に收められる。これ以外の成都刊本（蜀本と簡稱）と福州刊本（福本）はともにすでに亡佚しているが、日本の岐陽方秀（一三六一—一四三四）の『碧巖錄不二鈔』と大智實統の

『碧巖錄種電鈔』がそれを引用して張本との間に對校を加えている。日本にはさらに道元禪師が入宋した際に、一晚で寫しあげたテキスト（一夜本）がある。主な配列の違いは、張本と一夜本との間に見られる。前者は、垂示・本則・本則評唱・頌古評唱という配列で、後者は、示衆・本則・頌古・本則評唱・頌古評唱の順である。どちらの順序がその本来のすがたを示すものなのか、學者の意見は一致しない。例えば、鈴木大拙は後者が古い形態を代表すると考えるし、伊藤猷典は、前者が原型に符合して、より合理的であると見なした^②。しかし本来の順序は、垂示・本則・本則評唱・頌古・頌古評唱であるにちがいない。ここにその内の一則を選んで示そう^③。

垂示云、殺人刀、活人劍、乃上古之風軌、亦今時之樞要。若論殺也、不傷一毫。若論活也、喪身失命。所以道、向上一路、千聖不傳。學者勞形、如猿捉影。且道、既是不傳、爲什麼卻有許多葛藤公案。具眼者試說看。

垂示に云く、殺人刀、活人劍は、乃ち上古の風軌にして、亦た今時の樞要なり。若し殺を論ぜば、一毫も傷

つけず。若し活を論ぜば、身を喪い命を失う。所以に道う、「向上の一路は、千聖すら傳えず。學ぶ者の形を勞すること、猿の影を捉えんとするが如し」と。且く道え、既是に傳えずんば、爲什麼にか却つて許多の葛藤公案ある。具眼の者は試みに説き看よ。

【本則】舉。僧問洞山、「如何是佛。」鐵蒺藜。天下衲僧跳不出。山云、「麻三斤。」灼然破草鞋。指槐樹、罵柳樹。爲秤鎚。

【本則】舉す。僧 洞山に問う、「如何なるか是れ佛」。鐵蒺藜。天下の衲僧跳け出せず。山云く、「麻三斤」。灼然に破草鞋。槐樹を指して、柳樹を罵る。秤鎚と爲す。

【評唱】這個公案、多少人錯會。直是難咬嚼、無你下口處。何故。淡而無味。古人有多少答佛話、或云「殿裏底」、或云「三十二相」、或云「杖林山下竹筋鞭」。及至洞山卻道「麻三斤」。不妨截斷古人舌頭。人多作話會道、洞山是時在庫下稱麻、有僧問、所以如此答。有底道「洞山問東答西」、有底道「你是佛、更去問佛、所以洞山繞路答之」、死漢更有一般道「只這麻三斤便

是佛」。且得沒交涉。你若恁麼去洞山下尋討、參到彌勒佛下生、也未夢見在。……

【評唱】這箇の公案、多少の人錯つて會す。直是に咬嚼し難く、あなたが口を下す處無し。何故ぞ。淡くして味無し。古人に多少佛について答うる話有り。或は云く、「殿裏底」、或は云く、「三十二相」、或は云く、「杖林山下の竹筋鞭」と。洞山に至るに及んで卻つて道う、「麻三斤」と。不妨る古人の舌頭を截斷す。人話會多くを作して道う、「洞山 是の時庫下に在つて麻を稱る。僧の問うもの有り、所以に此の如く答う」と。有る底は道う、「洞山は東を問われ西を答う」と。有る底は道う、「你是是れ佛なるに、更に去きて佛を問う、所以に洞山は繞路に之を答う」と。死漢に更に一般有つて道う、「只だ這の麻三斤便ち是れ佛」と。且得沒交涉。你若しに洞山の句下に去いて尋討せば、參じて彌勒佛下生に到るも、也た未だ夢にも見ざる在。……

【頌】金烏急、左眼半斤、快鷄趕不。火焰裏橫身。玉兔

速、右眼八兩、姮娥宮裏作窠窟。善應何曾有輕觸。如鍾在扣、如谷受響。展事投機見洞山、錯認定盤星、自是闍黎恁麼見。跛鼈盲龜入空谷。自領出去、同坑無異土。阿誰打你鴿子死。花簇簇、錦簇簇、兩重公案、一狀領過、依舊一般。南地竹兮北地木。三重、也有四重公案。頭上安頭。因思長慶、陸大夫、癡兒牽伴、山僧也恁麼、雪竇也恁麼。解道合笑不合哭。呵呵、蒼天、夜半更添冤苦。咦。咄、是什麼、便打。

【頌】金烏急^{すばや}く、左眼は半斤、快鷄^{はや}も趕^おい及ばず。火焰の裏^{うら}に身を横^{よこ}う。玉兔速^{すみ}し、右眼は八兩。姮娥宮の裏に窠窟^{くう}を作す。善く應^{こた}へず何ぞ曾て輕觸あらん。鍾の扣^{つゝ}に在るが如く、谷の響^{こた}を受くるが如し。展事投機に洞山を見る、定盤星を錯^{まち}り認^とむ、自^もより是れ闍黎^{そなた}の恁^{いん}麼に見るのみ。跛鼈盲龜は空谷に入る。自ら領して出で去れ、同じ坑に異なる土無し。阿誰^{だれ}か你^{はな}が鴿子^{かぎ}を打ち死^こす。花簇簇、錦簇簇、兩重の公案、一狀に領過す。依舊^{いひやう}に一般^{おなじ}なり。南地の竹、北地の木。三重なり。也た四重の公案も有り。頭の上に頭^{あたま}を安^{やす}く。因^よつて思^{おも}う、長慶と陸大夫、

癡兒^{ちじつれ}伴^{ばん}を牽^ひく、山僧も也た恁^{いん}麼、雪竇も也た恁^{いん}麼。解^よくぞ道^{みち}えり、「笑^{わら}う合^あし哭^{なみ}く合^あからず」と。呵呵。蒼天。夜半更に冤^{おん}苦^くを添^そう。咦^い。咄^{とつ}、是^{なん}れ什麼^{なん}ぞ、便^{べん}ち打^{うち}つ。

【評唱】雪竇見得透、所以劈頭便道「金烏急、玉兔速」、與洞山答「麻三斤」更無兩般。日出月沒、日日如是。人多情解、只管道金烏是左眼、玉兔是右眼。才問道、便瞪眼云「在這裏」。有什麼交涉。若恁麼會、達磨一宗掃地而盡。所以道、垂釣四海、只釣獐龍。格外玄機、爲尋知己。雪竇是出陰界底人、豈作這般見解。雪竇輕輕去敲關擊節處、略露些子教你見、便下個注脚道、「善應何曾有輕觸。」洞山不輕酬這僧、如鐘在扣、如谷受響。大小隨應、不敢輕觸。雪竇一時突出心肝五臟、呈似你諸人了也。雪竇有「靜而善應頌」云、「觀面相呈、不在多端。龍蛇易辨、衲子難瞞。金鎚影動、寶劍光寒。直下來也、急著眼看。」……

【評唱】雪竇見得透す、所以に劈頭^{へきとう}に便ち道^{みち}う、「金烏急^{すばや}く、玉兔速^{すみ}し」と、洞山の「麻三斤」と答^{こた}うるに更に兩般^{りうぱん}無し。日出で月沒^{めつ}す、日日^{にちじつ}是^{かく}の如^{ごと}し。人

多く情解して、只管に道う、「金鳥は是れ左眼、玉兔は是れ右眼」と。問いて道うや才や、便ち瞳眼いて云く、「這裏に在り」と。什麼の交渉か有らん。若し什麼に會せば、達磨の正宗、地を掃つて盡さん。所以に道う、鈎を四海に垂れて、只だ獐龍を釣る、と。格外の玄機は、知己を尋ねんが爲なり」と。雪竇は是れ陰界を出づる底の人、豈に這般の見解を作さんや。雪竇は輕輕く敲關擊節の處に去いて、略些子を露し你をして見しむ。便ち個の注脚を下して道う、「善く應ず何ぞ曾て輕觸有らん」と。洞山 輕しく這の僧に酬えず、鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。大小隨い應じて、敢えて輕觸かず。雪竇は一時に心肝五臟を突出して、你諸人に呈似了れり。雪竇に「靜而善應の頌」有り云く、「觀面に相呈して、多端に在らず。龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞し難し。金鎚の影動き、寶劍の光寒し。直下に來たれり、負と眼を著けて看よ」と。

この構成を簡單に分析すれば、「垂示」は解題に近く、「本則」は古來の公案で、散文で書かれ、本則の評唱は、この公案を總評したもの。「頌古」は雪竇の偈頌で、韻文で書かれ、頌古の評唱は、この偈頌を總評したものである。その中の著語は、夾評に類似する。利器としての刀劍は、禪宗ではすべての會得知見、思慮分別の境界を斷ち切る譬えとして常用される。「殺人」「活人」とは、師が學徒に悟りをひらかせる時の生殺自在の手段を形容するために用いられるにすぎず、つまり相反しつつも相補い、向上の一路を示すに他ならない。だが學徒がもし句に拘泥するなら、「如猿捉影」、つまり勞多くして功無しを免れない。これがつまり「垂示」が示す本則公案の大意の在りかである。本則公案では、僧が洞山に「如何にして佛たるか」を問い、圓悟禪師が「鐵蒺藜。天下衲僧跳不出」と著語するのを舉げる。「鐵蒺藜」とは、そもそも地上に撒いて敵の攻撃をくい止める障害物で、僧を試すことを比喻している。洞山の回答「麻三斤」に圓悟禪師は著語して「灼然破草鞋。指槐樹、罵柳樹。爲秤錘」と云う。第一句では、この言葉を

あれこれ考える必要はないことをいい、第二句は、この語の言はここにあつても意は別の所にあることをいい、第三句では、この語が學ぶ人間に對する試しであることをいう。本則の評唱は、まず四種の誤解を擧げて、「もしもこんな風に洞山の句であれこれ悩んでいたら、彌勒が到來しても、夢に會うこともできないだろうよ」と指摘する。實際のところ、一着の袈裟を作るのに必要な布地はちようど麻三斤であり、僧衣はつまり僧自身を代表するので、それによつて學ぶ人間に、徹底的に呪縛を解き放ち、己自身に問うことを示そうとしたのである。本則評唱の大意はここにあらう。「金鳥」「玉兔」は日月を代稱し、「急」「速」は洞山の返答が電光石火のごとく間髪を容れないことを形容し、あわせて、應答が見事であつことはあやに墮していないことを言う。しかし、學ぶ者が悟らずに、用を體として、ことばの上に洞山の境地を見出そうとするなら、それはあたかも「跛龍盲龜が空谷に入る」ようなものだ、というのである。「花團錦簇」は、洞山の返答が創り出す世界を形容するが、文句にこだわれれば、麻は喪服に、竹は葬儀の杖に、

評點 源（張）

花團錦簇は棺桶に描かれる草花の形容となる。こうなると、まさに「笑うべきでも泣くべきではない」ということになる。これが頌古の意である。頌古評唱は、さらに一步進んでこの意を明らかにする。つまり、評唱は本則と頌古の妙處をその場その場で明らかにし、さらに總評を加えているのだ。スタイルから見れば、後世の評點とまったく一致するだろう。これまで、章句と評點、論文と評點、科擧と評點にわけてそれぞれ論述してきたが、形式から言えば、評點の最も完璧な模範は、評唱だとせねばなるまい。垂示は評點における題下の總論に類似し、著語は文中の旁批・眉比に、評唱（狹義の）は文末の總評に對應しよう。評點や符號が書き加えられていない點を除けば、評唱（廣義の）は、典型的な評點形式としてよからう。形式から言つてそうであるし、心理樣態から言つてもそうである。經典義疏および文學註釋が評點に與えた影響はこれまで論じたところだが、テキストそのものに對する態度から見ると、義疏と註釋がうやうやしく尊重する姿勢であるのに對し、評唱が古來の公案或いは偈頌に對するときは、平等もしくは優

越的ですからある。この方面において、評點の性格は評唱と非常に接近する。

禪宗は中國の文學批評に多大な影響を及ぼしている。禪宗の術語は晩唐五代の詩格に影響し、禪宗の語錄體は詩話體の誕生に影響し、禪宗の偈頌は宋代の論詩詩に影響している。これらはみな大量の證據物件によって實證することができる。評唱が評點に影響を及ぼしたのも、何ら不思議ではない。

『碧巖錄』が書物として成立する以前は、抄録本として二十年近く世に傳えられ、書物と成つてからは、さらに一世を風靡した。『禪林寶訓』卷四に引く心聞貫禪師「與張子韶書」に云う、

天禧間、雪竇以辨博之才、美意辨弄、求新琢巧。繼汾陽爲頌古、籠絡當世學者、宗風由此一變矣。逮宣政間、圓悟又出己意、離之爲『碧巖集』、彼時邁古淳全之士、如寧道者、死心・靈源・佛鑒諸老、皆莫能回其說。於是新進後生、珍重其語、朝誦暮習、謂之至學、莫有悟其非者。痛哉、學者之心術壞矣。^{⑥7}

天禧の間、雪竇は辨博の才を以て、意を美りて辨弄し、新を求めて琢巧す。汾陽を繼いで頌古を爲し、當世の學者を籠絡し、宗風此れに由りて一變す。宣政の間に逮び、圓悟又た己の意を出だし、之を離ちて『碧巖集』と爲し、彼の時の邁古淳全の士の、道に寧んずる如き者、死心・靈源・佛鑒の諸老、皆な能く其の說に回する莫し。是に於て新進の後生、其の語を珍重し、朝誦暮習し、之を至學と謂いて、其の非を悟る者有る莫し。痛ましきかな、學者の心術壞れり。

希陵『碧巖集後序』に云う、

圓悟禪師評唱雪竇和尚頌古一百則。剖決玄微、抉剔幽邃、顯列祖之機用、開後學之心源。……後大慧禪師因學人入室下語頗異、疑之。才勘而邪鋒自挫、再鞠而納款自降、曰、「我『碧巖集』中記來、實非有悟。」因慮其後不明根本、專尚語言以圖口捷、由是火之、以救斯弊也。^{⑥8}

圓悟禪師は、雪竇和尚の頌古一百則に評唱す。玄微を剖決き、幽邃を抉剔りて、列祖の機用を顯し、後學

の心源を開く。……後に大慧禪師 學人の入室下語の頗る異なるに因りて、之を疑う。勸するや才や邪鋒自ずから挫け、再鞠るや納款して自ら降りて、曰く、「我れ『碧巖集』中より記え來れり。實には悟り有るに非ず」と。因りて其の後の根本を明めず、専ら語言を尙びて以て口捷ならんと圖るを慮り、是に由りて之を火き、以て斯の弊を救うなり。

元の大徳四年、張煒が『碧巖集』を重刊したとき「宗門第一書」と署したのは、かれ自身の發明というよりは、この書が北宋末以來廣く流布していた事實を反映したものだ。佛教ないし禪宗が宋代の一般文人に與えた影響は、科擧受験生の科擧作文に佛語が多く用いられたことに顯著に示され、それは北宋後期以來の奏議詔令において、佛典の引用が幾度も禁じられるほどであつた。にもかかわらず南宋の科擧試験場で、士人たちが多用したのはやはり禪宗のモチーフであつた。『宋會要輯稿』選舉四「舉士十」に云う、

孝宗乾道五年正月十一日、臣僚言、比年科場所取試文、遽不及前。論卑而氣弱、浮虛稍稍複出、甚者強掇禪語、

充入經義。……相習相同、泛濫莫之所屆。此豈爲士人罪哉。薦紳先生則使然。伏願深詔輔弼、明勅有司、自今試士、必取實學切於世用者。苟涉浮虛、及妄作禪語、雖甚華靡、竝行黜落。庶幾學者洗滌其心、盡力斯文、以稱陛下總核之政。從之。

孝宗乾道五年正月十一日、臣僚言えらく、比年 科場にて取る所の試文は、遽かに前に及ばず。論は卑にして氣弱く、浮虛稍稍複出す、甚しき者は強いて禪語を掇し、經義に充入す。……相い習いて相い同じ、泛濫して之きて屆る所莫し。此れ豈に士人の罪ならんや。薦紳先生則ち然らしむ。伏して願わくは深く輔弼に詔し、明らかに有司に勅し、今ま自り士を試すに、必ず實學の世用に切なる者を取らしめんことを。苟しくも浮虛に涉りて、妄りに禪語を作すに及びては、甚だ華靡なりと雖も、竝びに黜落を行なう。庶幾わくは學者其の心を洗滌し、力を斯文に盡くし、以て陛下の總核の政を稱えんことを。之に従う。

さらに同書選舉五「貢舉雜錄」に云う、

慶元二年三月十一日、吏部尙書葉翥等言、二十年來、士子狃於偽學、沮喪良心。……專習語錄、詭誕之說、以蓋其空疏不學之陋、雜以禪語、遂可欺人。……蓋由溺習之久、不自知其爲非、欲望因今之弊、特詔有司、風諭士子、專以孔・孟爲師、以六經子史爲習、毋得復傳語錄、以滋其盜名欺世之僞。……從之。

慶元二年三月十一日、吏部尙書葉翥等言えらく、二十年來、士子 偽學に狃い、良心を沮喪す。……専ら語錄、詭誕の說を習い、以て其の空疏不學の陋を蓋い、雜うるに禪語を以てし、遂に人を欺くべし。……蓋し溺習の久しきに由りて、自ら其の非たるを知らず、欲望くは今の弊に因り、特に有司に詔し、士子を諷諭して、専ら孔・孟を以て師と爲し、六經子史を以て習と爲し、復た傳語錄を得て、以て其の盜名欺世の僞を滋すこと、母からしめんことを。……之に従う。

朝廷が再三にわたり禁止令を下したという情況から推測して、當時にあつてこのような現象は止み難かつたにちがいない。雪竇も圓悟ともに抜きんでた文學的才能があり、

當時の文人たちと交流も密でありまた多くもあり、深い尊敬を受けていた。著述も「宗門第一書」の譽れを受け、禪宗語錄が一世を風靡する時代にあつて、その影響力の大きさは、ゆめゆめ端倪すべからざるものだ。雪竇には頌古百則のほか、拈古百則があつたが、圓悟はそれにも評點を加え解説を施し、「佛果擊節錄」二卷と題した。評唱ということでは、後世、宋の天童正覺禪師の頌古に元の萬松行秀が評唱した『從容庵錄』、また宋の投子義青禪師の頌古に元の林泉從倫禪師が評唱した『空谷集』がある。評唱を詩學と並べて論じるのも、後人に多くの例がある。方回による『碧巖錄』大德四年序に云う、

自『四十二章經』入中國、始知有佛。自達磨至六祖傳衣、始有言句。曰「本來無一物」爲南宗、曰「時時勤拂拭」爲北宗、於是有禪宗頌古行世。其徒有翻案法、呵佛罵祖、無所不爲。間有深得吾詩家活法者。²⁴⁾

『四十二章經』中國に入りて自り、始めて佛有るを知る。達磨自り六祖の傳衣に至つて、始めて言句有り。「本來無一物」と曰うを南宗と爲し、「時時に勤めて

拂拭せよ」と曰うを北宗と爲す。是に於て禪宗の頌古世に行わるる有り。其の徒に翻案の法有り、佛を呵しかり祖を罵り、爲さざる所無し。間ま深く吾が詩家の活法を得る者有り。

萬松行秀『評唱天童從容庵錄』『寄湛然居士書』に云う、

吾宗有雪竇・天童、猶孔門之有遊・夏。二師之頌古、猶詩壇之李・杜。世謂雪竇有翰林之才、蓋採我華而不掩我實。又謂不行萬里地、不讀萬卷書、毋閱工部詩。言其博瞻也。擬諸天童老師頌古、片言隻字、皆自佛祖淵源流出、學者罔測也。^⑦

吾宗に雪竇・天童有り、猶お孔門の遊・夏有るがごとし。二師の頌古は、猶お詩壇の李・杜のごとし。世に雪竇に翰林の才有りと謂うは、蓋し我が華を採りて我が實を掩らざるなり。又た萬里の地を行かず、萬卷の書を読まずして、工部の詩を閲む母かれと謂うは、其の博瞻を言うなり。諸を天童老師の頌古に擬せば、片言隻字、皆な佛祖の淵源自り流出すれども、學ぶ者測る罔きなり。

となれば、評唱が文學に與えた影響はとりわけ重要だといふのも、決して根據のないことではない。その著述形式と心理様態が評點の形成を導く働きをしたこと、これまでの分析を通して、兩者の脈絡ははっきり目に見えるものとなつた。

評唱のことばの特徴は禪宗の語録と同じだが、より簡潔輕快で生き生きとしている。とりわけ著語のところは、正語・反語・雅語・俗語・冷嘲語・熱罵語・莊語・諧語・經典語・瘋癲語などが入り交じり、用いざるところ無しといつたぐあいだ。評點書における文中の夾評は、ことばの特徴こそ違え、同じく簡潔輕快で、一語ですばり核心を衝く。『古文關鍵』は「起得好」「承得好」「結有力」などの句を常用して構成を評點し、「灑脫」「警策」「煉句」といった語で文章を評點するが、こうした臨機應變の點評は、まさに評唱中の著語に類似し、讀者もしくは學徒の目を絶えず刺戟する。注意を引くのは、早期の評點書に頻繁に禪語が用いられることだ。『古文關鍵』卷上は韓愈「獲麟解」の「麟之所以爲麟者」という句を評して「百尺竿頭進一步」

と云うが、これはまさに禪宗の語で、『五燈會元』卷四「長沙景岑禪師」にその偈を掲げて「百尺竿頭須進步」と云い、卷六「茶陵郁山主」に白雲守端禪師の偈を掲げて「百尺竿頭曾進步」と云い、卷一七「黃龍祖心禪師」には、その語を録して「百尺竿頭進取一步」と云う。また同じく「師説」の「聖人之所以爲聖」の句を評して「使『袁盎傳』意、換骨法」と云い、たしかに江西詩派に「奪胎換骨」の説はあるものの、「換骨法」は實際には禪宗に由來する。^②後世、金聖歎評『水滸』などの、あの辛辣さは、いっそう禪宗の氣風から得ていよう。『讀第五才子書法』では、禪宗の「咬人屎擲、不是好狗」をそのまま用いているし、『讀第六才子書西廂記法』も、趙州和尚の「無」によつて『西廂記』を論じるのが常である。そのため評點について述べるのに、禪に喩えを取ろうとする者もあった。姚鼐「與陳碩士箋」に「文家之事、大似禪悟、觀人評論圈點、皆是借徑。一旦豁然有得、呵佛罵祖、無不可者。（文家の事は、大いに禪悟に似て、人の評論圈點を觀るに、皆な是れ徑を借る。一旦豁然として得る有らば、佛を呵し祖を罵するも、可なら

ざる者無し）（「惜抱軒尺牘」卷五）と云い、おなじく「答徐季雅」には「夫文章之事、有可言喻者、有不可言喻者。不可言喻者要必自可言喻者入之。……圈點啓發人意、有愈於解說者矣。（夫も文章の事は、言喻すべき者あり、言喻すべからざる者有り。言喻すべからざる者は、必ず自ずから言喻すべき者を要めて之に入る。……圈點は人意を啓發し、解說に愈ます者有り）」（同前卷二）と云う。このように評點が文學と他のジャンルとの懸橋として作用していることは、ちょうど評點自體が學ぶ者を導く役割を果たすのに似ていて、つまりひとたび理を悟れば、魚を得て筌を忘れ、岸に抵りて筏を捨てべし、というぐあいなのだ。

傳統中國における文學批評形式のうち、最も民族的な特徴を備え、かつ最も廣汎かつ長期にわたつたものを舉げれば、摘句「選句」・選集・論詩詩・詩格・詩話そして評點であろう。評點形式はその中でも最も遅く形成されたため、吸収した要素も最も複雑である。本論では、四つの側面からその淵源を探つたが、強いて概括的な説明を加えるとす

るなら、こう言えるだろうか。章句は符號と書式の手本を提供し、前人の文章論の發展が評點の重心を決定し、科舉は評點の誕生を呼び起し、評唱は著述のモデルを打ち立てたのであると。評點の批評は微細な分析に重點があり、

局部に着目して検討を加えていくため、どうしても「識小」の譏りを免れない。しかし、中國における文學批評全體の體系の中で考えると、評點は、テキストそのものの優劣に最も意を注ぎ、さらに文學の美がいったいどこにあるのか、何が美なのかを明らかにすることに力を盡くし、またテキストの構造・形象・措辭など、文學の形式に屬する部分への分析も重視し、二次的なものであったにせよ、筋立てや内容の考察を怠ることもなかった、と位置づけうる。中國の文學批評がこの方面で果たした成果は、われわれのさらなる解明を待っているのである。

二〇〇〇年十二月二十八日、京都大學文學部にて

付記

本稿は、張伯偉教授が、二〇〇〇年九月から二〇〇一年三月まで京都大學客員教授として滞在された期間に、『中國文學報』

評點 遼源（張）

のために寄稿された。翻譯にあたっては、譯者の注記を〔 〕内に記し、引用は句讀も含めて中文原稿を尊重したが、原典に照らして改めたところがある。なお『碧巖錄』の訓讀は入矢義高等譯注『碧巖錄』（岩波文庫、一九九二年）に據った。

註

① この語は方回『瀛奎律髓』卷十姚合「遊春」評語「予謂詩家有大判斷、有小結裹」に基づく。『瀛奎律髓彙評』三四〇頁（上海古籍出版社、一九八六年四月版）。後の人はしばしばこの語を評點と結びつけて論ずる。例えば、黃宗羲「答張爾公論茅鹿門批評八家書」には、「其圈點句抹多不得要領。……至其批評謬處、姑舉一二。……緣鹿門但學文章、于經史之功甚疏、故只小小結果、其批評又何足道乎」（『南雷文定』初集卷三）という。

② 呂思勉『文字學四種』、五二頁。上海教育出版社、一九八五年六月版。

③ 『論語』先進篇に、「文學は子遊、子夏」という。

④ 『古書句讀釋例』、二頁。中華書局、一九六三年一月版。

⑤ 句、讀の区分は唐代に始まる。語意が完了したものを句とし、語意の未完で誦讀する上で停頓ある箇所を讀とした。湛然『法華文句記』には、「凡經文語絕之處謂之句、語未絕而點之以便誦詠謂之讀」という。

⑥ 李正宇『敦煌遺書中的標點符號』（『文史知識』一九八八年

第八期)、また石塚晴通『敦煌の加點本』(池田溫編『敦煌漢文獻』二二九頁—二六一頁、大東出版社、一九九二年三月版)参照。

⑦ 葉德輝『書林清話』卷二「刻書有圈點之始」條參照。

⑧ 宋祁『宋子京筆記』卷上に、「古人寫書盡用黃紙、故謂之黃卷。顏之推曰、『讀天下書未徧、不得妄下雌黃』、雌黃與紙色類、故用之以滅誤」とみえる。

⑨ 黃季剛先生『禮學略說』に、「鄭君注『禮』、大抵先就經以求例、複據例以通經。故經文所無、往往據例以補之。經文之誤、往往據例以正之」という。(『黃侃論學雜著』、四五九頁。上海古籍出版社、一九八〇年四月版)

⑩ 牟潤孫『論儒釋兩家之講經與義疏』(『注史齋叢稿』、三〇三頁—三五五頁。中華書局、一九八七年三月版)、戴君仁『經疏的衍成』(『梅園論學續集』、『戴靜山先生全集』所收、一一三頁—一五五頁、一九八〇年九月版)參照。

⑪ 吉藏『仁王般若經疏』卷上に、「然諸說佛經、本無章段、始自道安法師」(『大藏經』第三十三冊、三一五頁)という。

『高僧傳』卷五の記載によれば、道安は「理懷簡衷、多所博涉、内外群書、略皆遍略。陰陽算數、亦皆能通。外涉群書、善爲文章。苻堅敕學士、内外有疑、皆師於安」という。内外の群書に廣く通じていたからには、彼は儒家經典章句の學についても必ずや文獻を涉獵していたであらうし、同時にその影響を受けてもいたであらう。戴君仁が次のように指摘する

のが参考となる。「儒家的經疏、自有它本身的歷史、由漢曆晉、以至南北朝、逐漸衍變而成、不是單純的由佛書產生出來的、可以說是二源的、也可以說是中印文化合產的」(前掲『經疏的衍成』)。

⑫ 宋の王雱『古文集成』卷六十五『獲麟解』の下に、駁齋の批語「自首及末、立爲五段、抑揚開合、皆以『祥』字爲主」を引くのも、また呂祖謙の説を受けたものである。

⑬ 牟潤孫『論儒釋兩家之講經與義疏』第六節至第八節(『注史齋叢稿』二六〇—二七九頁)參照。

⑭ 『大藏經』第五十二冊、二三九頁。

⑮ 『瀛奎律髓彙評』、七八頁。

⑯ 金聖歎の評點と經典義疏との關係は、彼自身によって語られている。例えば、「如此一段文字、便與『左傳』何異。……蓋『左傳』每用此法、我於『左傳』中說、子弟皆謂理之當然、今試看傳奇、亦必用此法。……甚矣。『左傳』不可不細讀也。我批『西廂』、以爲讀『左傳』例也」(『貫華堂第六才子書西廂記』卷四)など。彼はさらに杜甫「江村」詩を評して次のようにもいう。「問、江村如是、即令人如何去來。答、我有何人去來、自去自來、止有梁上之燕耳。問、若無去來、然則與何人親近。答、我與何人親近、相親相近、獨此水中之鷗耳」(『唱經堂杜詩解』卷二)。この様な手法は、『公羊傳』がもつばら發問によつて篇を開き、また六朝の義疏も問答を採用するのに似る。『隋書』經籍志には、梁に「春秋公

羊傳問答」五卷、荀爽問、魏安平太守徐欽答、また「春秋公羊論」二卷、晉車騎將軍庾翼問、王衍期答」を著録する。

- 儒家と佛教の經講にはともに都講の職があつて、専ら發問に従事する。湯用彤『漢魏兩晉南北朝佛教史』は、「按佛教傳説、結集三藏時、本系一人發問、一人唱演佛語。如此往復、以至終了、集爲一經。故佛經文體、亦多取斯式」と指摘する。
- ①⑦ 『管錐編』第四冊、一二五頁。中華書局、一九八六年六月版。

- ①⑧ 李卓吾『書繡像評點忠義水滸全書發凡』などは、「書尙評點、以能通作者之意、閱覽者之心也」と云う。

- ①⑨ この書は早く失われ、史志にも著録が見えない。「文鏡秘府論」南卷「論文意」にこれを引用する。

- ②⑩ 張伯偉『禪與詩學』理論篇「佛學與晚唐五代詩格」、一二二—一二五頁（浙江人民出版社、一九九二年九月版）を参照されたい。

- ②⑪ 晁公武『郡齋讀書志』卷十三「詩眼」に、「溫、范祖禹之子、學詩於黃庭堅」と云う。また呂本中『紫薇詩話』には、「表叔范元實（溫）既從山谷學詩、要字字有來處」とあり、その詩學の淵源がどこにあつたかが窺える。

- ②⑫ 『直齋書錄解題』附錄三、七一一頁。上海古籍出版社、一九八七年十二月版。

- ②⑬ 俞平伯輯『脂硯齋紅樓夢輯評』、六頁。中華書局、一九六〇年二月版。

評點淵源（張）

- ②⑭ 「文選」と「玉臺新詠」に表れる文學觀念は常に同じではなく、序文の中に既に異なる主張が示される。前者は「事出於沈思、義歸乎翰藻」を強調し、後者は「唯屬意於新詩、

……選錄艷歌」のごとく、艷情に重點を置く。選目の上では、「文選」所收の詩歌が最も多い詩人は陸機で、全部で四十五首ある（「玉臺新詠」は十三首の詩を収める）。一方、「玉臺新詠」に最も多く選錄される詩人は沈約で、全二十七首である（「文選」は詩十三首）。同じく沈約の詩であつても、「文選」に收められるのは比較的謹嚴な作品であるのに對し、「玉臺新詠」では多くが艷情詩で、共通の詩は一首しかない。

- ②⑮ 『隋書』經籍志には、「文章流別集」四十一卷を著録し、その注に、「梁六十卷、志」二卷、「論」二卷」と記す。また「文章流別志論」二巻も見える。「翰林論」三巻には、その注に「梁五十四卷」とするが、この書の原名は恐らく「翰林」と思われるが、これは當時の總集に廣く行なわれていた命名法の一つで、同様のものには、「集林」、「詞林」、「七林」、「書林」などがある。

- ②⑯ 陳尚君『唐人編選詩歌總集敘錄』（中國詩學）第二輯。南京大學出版社、一九九二年十二月版）参照。

- ②⑰ 傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』、一一五頁。陝西人民教育出版社、一九九六年七月版。

- ②⑱ 郭紹虞『清詩話續編』、四六頁。上海古籍出版社、一九八三年十二月版。

②⑨ 錢存訓『中國古代書史』、九五—九九頁。香港中文大學出版社、一九七五年三月版。

③⑩ 敦煌文獻中には、儒家典籍としては、『周易』王弼注、『尚書』孔安國傳、『詩』毛傳鄭箋、『春秋左傳』杜預集解、『春秋公羊傳』范甯集解、『禮記』鄭玄注、『爾雅』郭璞注、『論語』鄭玄注、皇侃疏、『孝經』鄭玄注等が残る。また現存する唐抄本中には卜天壽抄の『論語』鄭注などがあるが、みなこの格式を有する。

③⑪ 小尾郊一・富永一登・衣川賢次『文選李善注引書考證』上下（研文出版、一九九〇年二月、一九九二年二月版）の統計による。

③⑫ 卷一六には江淹『恨賦』の「孤臣危涕、孽子墜心」句を評して、「心當云危、涕當云墜。江氏愛奇、故互文以見意」と云う。また卷二十三には、曹植『七哀』の「明月照高樓、流光正徘徊」句を評して、「夫皎月流輝、輪無輟照、以其餘光未沒、似若徘徊。前覺以爲文外傍情、斯言當矣」と云う。

③⑬ 柳詒徵『述社』（『柳詒徵史學論文續集』、二七三—二八九頁、上海古籍出版社、一九九一年十二月版）参照。

③⑭ 歐陽光『宋元詩社研究叢稿』下編「宋元詩社叢考」（廣東高等教育出版社、一九九六年九月版）に挙げるところに據れば、當時の詩社でわかっているものは六十近くにも上る。當時實際にあつた詩社の数は、當然ながら遙かに多かつたはずである。

③⑮ 『月泉吟社』は全部で二七三五もの詩の答案を収めたが、現在では僅かに前六十人及び附録の句圖三十二聯を残すのみで、完本ではない。明人李東陽の『麓堂詩話』には、「今世所傳、惟浦江吳氏月泉吟社、謝翱爲考官、『春日田園雜興』爲題、取羅公福爲首。……聞此等集尙有存者、然未及見也」と記す。明代にはこのような資料がすでになくなつていたことがわかる。

③⑯ 吳渭が主催する「月泉吟社」は、「月泉舊社」を基礎として再興したもので、その投稿規約には「諸諸處吟社用好紙楷書、以便臚副」という語が見える。第一位の羅公福は「杭清吟社」出身で、それ以外の者には「古杭白雲社」、「孤山社」、「武林社」、「武林九友會」などの出身者があつた。この詩社活動が比較的廣汎な社會的基礎を有していたことが知れよう。

③⑰ 全祖望『跋月泉吟社後』には、「當時主盟如方・謝・吳三先生、至今學士皆能道其姓氏、而社中同榜之人、自仇近村（遠）外、多已淹沒不傳」（『鮑埼亭集外編』卷三十四）と記す。これは一例であるが、他にもこれに類するものは非常に多い。

③⑱ この問題に關しては、程千帆先生の『唐代進士行卷與文學』（上海古籍出版社、一九八〇年八月版）、傅璇琮『唐代科舉與文學』（陝西人民出版社、一九八六年十月版）二書に詳細な考察が見え、參考となる。

③⑲ 張伯偉『全唐五代詩格校考』附錄四『全唐五代詩文賦格存

目考」、五四九—五五五頁。陝西人民教育出版社、一九九六年七月版。

④① 張庭堅（才叔）『自靖人自獻於先王義』のこと。呂祖謙『宋文鑑』卷一一一「經義」所收。

④② 『宋史』選舉志に、「宋之科目、有進士、有諸科、有武舉。常選之外、又有制科、有童子舉、而進士得人爲盛」とある。馬端臨『文獻通考』選舉考五には、呂祖謙を引用して、「唐初間、進士、明經都重、及至中葉以後、則進士重而明經輕。……到得本朝、待遇不同、進士之科往往皆爲將相、至明經之科、不過爲學究之類」と記す。

④③ 宋代の科舉およびその變遷については、荒木敏一『宋代科舉制度研究』（東洋史研究會、一九六九年三月版）、侯紹文『唐宋考試制度史』（臺灣商務印書館、一九七三年七月版）、何忠禮『宋史選舉志補正』（浙江古籍出版社、一九九二年三月版）を参照。

④④ 司馬光「起請科場劄子」は次のように批判する。「王安石不當以一家私學、欲掩蓋先儒、令天下學官講解、及科場程式、同己者取、異己者黜」（『傳家集』卷五十四）。また蘇軾「答張文潛書」には、「文字之衰、未有如今日者也。其源實出於王氏。王氏之文、未必不善也、而患在於好使人同己。……地之美者、同於生物、不同於所生。惟荒瘠斥鹵之地、彌望皆黃茅白葦、此則王氏之同也」（『經進東坡文集事略』卷四五）と云う。

評點 週源（張）

④⑤ 何忠禮『宋史選舉志補正』附錄三「宋代進士科省試試藝內容變遷表」に據る。「四庫提要」は「紹興九年定以四場試士」と記すが、何に據るかは未詳。

④⑥ 曾國藩『經史百家簡編序』に、「試官評定甲乙、用朱墨旌別其旁、名曰圈點。後人不察、輒仿其法、以塗抹古書、大圈密點、狼藉行間」と云うのも、科舉と評點とにこのような關係が有ることを指摘するものである。

④⑦ より早い用例では、沈約が提起した「八病」に、「平頭・蜂腰・鶴膝・上尾」と云うのも同様の方式を用いたものとして挙げるべきであろう。ただ、これはもちろん科舉と無關係とはいえないものの、沈約はこれによつて贅病を形容したのであつて、後世の大多數の用例とは異質である。また、「論學繩尺」卷首「論訣」にも「蜂腰體」、「鶴膝體」が見えるが、そこで議論されるのは、句の構造の問題である。

④⑧ 『全唐五代詩格校考』、一〇五頁。

④⑨ 同、三四〇頁。

④⑩ 『四庫全書總目』卷一八七「論學繩尺」の提要には、「其破題・接題・小講・大講・入題、原題諸式、實後來八比之濫觴、亦足以見制舉之文源流所自出焉」と指摘する。

④⑪ この説は、實は『金針詩格』に基づき、そこでの「贅聯」「落句」という用語を「頸聯」「結句」と改めたものである。葉燮『原詩』内篇下に「律詩必首句如何起、三四如何承、五六如何接、末句如何結、……此三家村詞伯相傳久矣。」と

- 云う。『師友詩傳續錄』は王士禎が「律詩論起承轉合之法否」という問いに答えて「勿論古文今文、古今體詩、皆離此四字不可」、また「起承轉合、章法皆是如此、不必拘定第幾聯第幾句也」と云ったと記す。起承轉合の詩學における展開に關しては、蔣寅「起承轉合：機械結構論的消長」中の三、四節に詳論があり、参考になる（『文學遺產』一九九八年第三期）。
- ⑤② 『四庫全書總目』卷一八七『月泉吟社詩』提要に、「其人皆用寓名、而別注本名於其下、如第一名連文鳳該稱羅公福之類、未詳其意。豈（方）鳳等校閱之時、欲示公論、以此代糊名耶」と推測するのは、首肯しやすい。

- ⑤③ 『四庫全書總目』卷二六六『屏岩小稿』提要に、「越中詩社以『枕易』爲題、李應祈次其甲乙、以觀光爲第一、其詩今見集中、並載應祈批。……（案、黃庚『月屋漫稿』亦稱以『枕易』詩爲李侍郎取第一。一試有兩第一、必有一僞。然無可考證、謹識於此」とある。

- ⑤④ 『大藏經』第四十八冊、一三九頁。

- ⑤⑤ 『五燈會元』卷四「黃檗希運禪師」、卷十「清涼泰欽禪師」諸章を参照。

- ⑤⑥ 『汾陽無德禪師語錄』卷中、「大藏經」第四十七冊、六一五頁。

- ⑤⑦ 『大藏經』第四十八冊、一四一頁。

- ⑤⑧ 同上、一四四頁。

- ⑤⑨ 同上、二二四頁。

- ⑥⑤ 張伯偉「對立與融合——宋代禪宗史上一個問題的研究」（一九九二年佛學研究論文集・中國歷史上佛教問題）、一七九—二〇四頁。臺灣佛光文化事業公司、一九九八年四月版）を参照。

- ⑥① 雪竇の選んだ公案は、『楞嚴經』の一則、『維摩經』の一則、『金剛經』の一則以外の九十六則は、まさに雲門宗に基づくもので、文偃禪師の公案に言及するものも實に十五則の多きに達している。

- ⑥② 伊藤猷典は、内容からみて、本則評唱と本則著語の末句に常に重複があるのは、明らかに兩者が接近していて混じりあったためで、本則評唱の最後がしばしば「所以頌出」という表現であることからすると、すぐ後ろに頌古の文が續いていたはずで、それは受學者側から考えても、評唱をそれぞれ本則と頌古にすぐ繋げた方がずっと便利である、との認識を示す。『碧巖集定本』卷首（『碧巖集定本刊行の趣旨』、三三頁。理想社、一九六三年三月版）を参照のこと。

- ⑥③ 『大藏經』第四十八冊、一五二—一五三頁。この公案について、頌古および評唱は内容上の闡説となっている。入矢義高等譯注『碧巖錄』は簡にして要を得た解釋で、参照に値する。（岩波書店、一九九二年六月版）。

- ⑥④ 李時珍『本草綱目』卷十六には、「蒺藜、弘景曰、多生道上及牆上、葉布地、子有刺、狀如菱而小。長安最饒、人行多著木履。今軍隊乃鑄鐵作之、以布敵路、名鐵蒺藜」と云う。

- ⑥5 入矢義高『麻三斤』（『自己と超越』、八七—九三頁。岩波書店、一九八六年九月版）参照。中譯文（劉建譯）は、『俗語言研究』第二期（日本花園大學禪文化研究所、一九九五年六月版）。また芳澤勝弘に『麻三斤』再考があり、中譯文（殷勤譯）は『俗語言研究』第三期（一九九六年六月版）に見える。ともに参照に價する。
- ⑥6 張伯偉『禪與詩學』理論篇「佛學與晚唐五代詩格」、「禪學與詩話」、「禪學與宋代論詩詩」、三一—九六頁。
- ⑥7 『大藏經』第四十八冊、一〇三六頁を参照。
- ⑥8 同上、二二四頁。
- ⑥9 荒木敏一『宋代科舉制度研究』第六章「北宋末南宋初期の科場と佛教」、三八—四〇二頁。
- ⑦0 『大藏經』第四十八冊、一三九頁。
- ⑦1 同上、二二六—二二七頁。
- ⑦2 前掲、張伯偉『禪與詩學』、四六—四九頁を参照。